
桜坂高校帰宅部

石崎京悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜坂高校帰宅部

【Nコード】

N7325A

【作者名】

石崎京悟

【あらすじ】

卒業を控えた相葉は、振り返った。自分が過ごしてきた三年間を。ケンイチとの出会い、別れ。二人の出会いから始まり、帰宅部はさまざまな人間模様を織り成していく。

相葉洋子 一年（前書き）

帰宅部シリーズ第一弾、帰宅部の女帝「相葉」を描いた三部作。第一作目。

相葉洋子 一年

いつだったかの話

木造の天井。電気は消えていて、埃っぽい木目は見えない。窓を見ても暗く、近くの公園で咲いていたはずの桜は不気味な影になっており、私は目を逸らしていた。敷かれた布団は暖かく、切ない。私一人ではないから。

ふと顔を横に向けると、隣の男はまた布団からはみ出ている。寝相ではない、起きているのは分かっている。

避けているのだ 私を。

何で……？

「ねえ……………」

私は横にいる彼の名を呼んだ。
続けて、聞いた。

訴えに近かったかもしれない。

どうして何もしないの？

私が汚いから？

「違う。そんな事は、言わないでくれ」
違うのなら、何故？

いいじゃないの、抱けば。
私は好きよ。

何故拒むの？

触れられない？

どうして触れられないの？

黙らないでよ。

初めてってワケじゃないんでしょう？ 私知ってるんだから。

せめて……答えてよ。

「
」

……え？

聞こえないわ。

「
」

そんなの、そんなの今更になって……。

卒業式前日。

私は相葉、桜坂高校三年生。後輩に姉ちゃんと慕われ、同学年には『ケンイチの恐ろしい彼女』と退かれている。

ケンイチの彼女、周りはそう言う。否定するのはややこしく、複雑な感情が絡み合っていて、誰かに説明をするのは面倒くさいし、私にはその事を話すだけで胸が痛くなるから嫌なのだ。多分、ケンイチもそうだろう。

だから私は誰にも、何も言わない。

これから語るのは私ではない。

何の因果か、わざわざ卒業式前日に映し出される、私の夢なのだ

から。

三年前 春

高校の入学式、初めてのホームルーム。まだ名も知らない皆が緊張を隠せない中、私の前に座っている男子は急に振り返り、

「ケンイチって言うんだ。よろしく」

堂々と話しかけた。男子の笑顔は、ちっとも固まってい、至って自然な笑顔だった。

「え？ あ、ああ……よ、よろしく」

私にとってそれは意外でつい、しどろもどろになる。

ケンイチは私の返事を聞くと子供のような声色を出し、

「あくしゅあくしゅ」

その奇妙なコミュニケーションの取り方に、

「は、はあ……」

戸惑いながらも求められた握手に答えた。

「こら、石田」

こつんと、先生に叩かれた。大して痛いはずもないのに、ケンイチは大袈裟に顔を歪めた。それはとても滑稽で、私は吹き出しかけてうつむいた。

「痛いッスよ、先生。何も入学早々、新入生を小突かなくてもいいじゃないですか」

唇を尖らせて抗議する。先生は笑い、

「お前が初日から遅刻しないような生徒なら、俺も注意だけで済ますぞ」

指摘する。ケンイチは苦笑いになって、

「ごもつともです」

仰々しくふざけて返事した。

「馬鹿」

先生も呆れて、それだけ言い放って教壇に戻った。ケンイチは先生が背を向けている僅かな間を見逃さず、こちらを見て、

「怒られちゃった」

痛そうな顔で叩かれた部分をさすり、舌を出しておどけて見せた。私は屈託のないケンイチに好感を持つ。

「付き合ってくれないか？」

ケンイチが言ってきたのは一週間もしない、電話口での会話の中だった。

ケンイチと話すのは楽しい。

普段話しているだけでも、些細なことで口ゲンカになっても、結局笑い事にしてしまう。私がその事で本気で怒っていてもだ。まるで私を昔から知っているかのように。

知らなかった。

男の子と付き合うのがこんなに楽しいなんて。

私が中学生の頃に嫌われ者だったせいもある。

（理由は今でも思い当たらない。いずれ誰かに回ってくるそれが、たまたま私だったのだろうと今は納得している……させている）

そのせいで日常における全てに嫌気がして、早くこんな所から出ていきたいと、ずっと進学を夢見てきた。新しい境地で全てをリセットし、高校でやり直したかった。

今、私の隣にケンイチがいる。『嫌われ者』と扱われた私を『好きだ』と慕うケンイチ。

私は彼が『好き』なのか知らない。私の中にあるケンイチへの感情、これをその言葉に当てはめるべきだろうか？

私は言われ慣れていない言葉を耳にし、それに照れているだけではないのか？

『好き』ではなく、私を慕ってくれて『嬉しい』だけじゃないの？
そこがハッキリしないと、ケンイチとは付き合えない。

ケンイチとこんな感情で付き合うなんて、そんな自分勝手は許せない。

ケンイチをがっかりさせたくない。彼とどう付き合うのか、ちゃんと決着が付くまで私は答ええない。

ケンイチには、伝えてある。

「考えさせて」

彼は過ぎて行く日常で、ただ、私の答えを待っている。

でも、少し不思議。ケンイチは何にも変わらない。

だから、私はつい尋ねる。

「答えを待つつて、辛くない？」

私は貴方を待たせているのが辛い。もう考えたくない位にまで考えた。それでも、苦痛を伴いながら考えて。それは私が貴方をいい加減に思っていない証拠。

ケンイチは沈黙して、しばらくしてから答えた。

「相葉が長い時間考えてくれるのは、それだけ俺のことを考える証拠だろ。それって嬉しい事だと思うよ。だから、しばらくは待つよ」

……同じ考え。

「辛いかって聞かれたら、辛いかな。だから、待ち疲れてどうにかなる前に答えてよ。もし相葉が『付き合う』って言うってくれても、本人が壊れてちゃね」

私はケンイチのこういう点で驚く。真面目な話で、軽くふざけられる人間なんか、私の周りにいない。ケンイチはホントに私と同じ高一なんだろうか。

彼は大人だ。私なんかよりずっと……だから私は考えるんだ。彼と対等に付き合うために。

週末はいつもデートだ。遊園地に映画館、カラオケとボウリング、二人だけなのにとっても楽しい。

お互いの家にも行った。ケンイチは女の子の家に入るのが初めてだったらしく、私の家では凄く緊張して、居る間中ずっと正座になって、足が紫色になってもがんばった。私はずっと崩してもいいと心配していたが、最後には、

「あははははは！」

ケンイチがしびれた足を相手に悪戦苦闘するのがおかしく、指を指して笑った。

逆に私がケンイチの家に行くと、お母さんは普通の対応だったが、弟が問題だった。ケンイチの話では、私は弟に似ているらしい。女の私を男と被らせるのはどうかと思う。まあ、ケンイチらしいと言えはそうだけど……。

「ただいまー」

弟は何処かに出かけていたらしく、私がケンイチの部屋で一段落して彼と雑談をし始めた時に帰ってきた。

弟の部屋はケンイチの部屋を横断しなければ入れないようになっていて、私とは嫌でも顔を会わすことになる。

どんな弟かな……？

期待と不安を巡らし、弟が戸を開けるのを待った。

廊下から近づいてくる足音、ケンイチの部屋の戸が開かれて、兄とは全然似つかない童顔が現れた。

あんまり似てないので、私は言葉を失ってしまった。

ケンイチの弟はケンイチとは三つ違いで中学生になったばかり。それで幼く見えたとしても、私にはまだ小学生でさらに低学年の顔が、体だけ大きくなったようなアンバランスのせいで、何も知らない純粹そうな印象を受けた。生き字引のようなケンイチとはまるっ

きり正反対である。

兄弟だから似てないとおかしいという訳ではない、そういうものもいる。

ただ、あんまりにも違うんで、

「お邪魔してます……」

私は変に緊張してしまい、余所余所しく挨拶する。ケンイチの弟はしばし私を見つめて、逃げた。

階段を駆け上がり、乱暴にドアを閉める音がした。

「おお？ ヤツめ、俺の想像以上の反応を！」

大笑いするケンイチに、

「喜んでないで、私はどうしたらいいのよ！」

困惑する私。

それからも弟は物陰からこちらの様子を窺ったり、ケンイチの部屋を通る度に駆け足になったり、まるで初めて見た生き物に対してするような反応を見せていた。

ケンイチも弟の異様な反応に笑っていらなくなり、

「彼女連れてきたのがそんなに珍しかったかなあ……？」

普段でも弟は無愛想で人見知りが激しい。だが、とても優しい弟で今日は変に緊張しているだけなのだと、私に懸命にフォローしていた。こんなに焦ったケンイチは初めて見た。

ケンイチの家は面白かったんだけど……弟が……。

それよりケンイチっておかしい。同じ高校一年生なのに、会話の内容は大人っぽい。それなのに、現れる表情は子供のようどころこると豊かに変わる。

やはり私はそんなケンイチが好きなのだろう。

秋

放課後。図書館に用事があった私は衝撃を受ける。ケンイチが本を読んでいたのだ。

今までに見たこともない表情。とても穏やかで彼の周りにある空間が止まっているかのよう。ただ目だけが懸命に字を追っている。砂地が水を吸うように、彼の目が字を読み取っている風に見えた。でも、彼は砂地が泥に変わるほど、同じページを読み、次のページを捲るまで時間を掛けていた。

読むのが遅いはずはない。ケンイチはよく図書館に入り浸り、文庫程度の本は昼休み中に読みきってしまう。そしてその日の放課後に、その内容を嬉々として話すのだ。

私はそのいつもと違う読書法を、静かな表情で懸命に読む彼の姿と、その空間独特の雰囲気を感じと見入っていた。

チャイムが鳴る。

彼は天井を仰いでチャイムの音を確認した。時計を見ながら席を立つ。本を戻しに何処かへと消え、また別の本を持ってきてその本に付録された貸出カードに記入し終わると、私の方へとやって来る。「待った？」

驚いた。

……私って、何度ケンイチに驚かされているんだろう？

「知ってたの？」

私はそのままの感想を口に出す。だって、こちらを見たような節はなかったし。

彼は微笑んで、

「うん」

「そんな素振りは無かったよ」

「図書館に近づく足音と、扉の開け方で解った。相葉のそれは覚えてるから」

そんなんで判別できるんだ……。ちょっと怖い気もするけど、嬉しいような……。でもやっぱり変かな……？

ん……待つて。

「知ってて、今までほつといたの？」

訊くとケンイチは苦い顔をして、

「実は入ってからどうしたのが、よく分からなかったんだ。そのまま近づいてくれば声を掛けようと思ってたし、まさかドアを開けたままじっとしてるとは思わなかったんで、オレを確認してどっかに行ったかとはかり思ってたんだよ」

「じゃ、確認してくれてもいいじゃない？」

いつにもなく食い下がる私。私と解ってたのなら、本なんか読まずに見てほしかった。

「私があそこでじっとしていたのは、あなたを見ていただけじゃないのよ。ケンイチが止まっているような空間を破って、私の事に気付いてほしかった。本を閉じて私の元へ来て欲しかったのよ！」

なんで、こんなに怒鳴っているんだろう。なんでこんなに感情が吹き出すんだろう。

本に嫉妬？ いや、違う。私の知ってるケンイチがあのに消えていたのが、彼のまた新しい部分を発見して自分が離されていることを実感したのが嫌なんだ。

「解らないからってほつとかないでよ！」

嫌だ。こんな黒い気持ちは……ケンイチの前でこんな……こんな八つ当たりのような子供っぽい気持ちをぶつけるのは嫌だ！

「相葉？」

ケンイチの声を振り切つて走る。下駄箱へ。

何で？

走る、外へ。

何故私は出ていくの？

訳の分からないまま飛び出そうと、

「！」

ギョツと腕が捕まった。駆け出そうとした足が勢い余って、倒れそうになる。

背中を優しく支える手。

「待ってよ！」

ケンイチは怯えているように瞳が揺れていて、それでいて優しい顔だった。

いつかケンイチが言った言葉を思い出す。

『オレは甘いんだ。優しくは無いと思う。例えば家族が、相葉が盗みを働いても、オレを刺しても許すだろう。それは優しさじゃない。優しさは厳しさが一緒じゃなきゃ、そうじゃない……』

思い出した言葉を呟く私に、ケンイチは辛そうな顔をする。ケンイチはもう、何が言いたいかわかっている。

「ごめんよ」

胸が熱くなった。

「私は変なことを言って逃げたのよ？　なんで優しい顔で捕まえるの？　なんですぐに責めないの？　付き合っのがケンイチと初めてでも、これ位のことは分かる……」

顔も熱い。何もかもが熱くなっていく。

「私の心は変わった！　ケンイチは変わらない！　何故なの！？」

涙が溢れる。熱くなった顔を冷まそうとしているはずなのに、その流れていく軌跡はもっと熱くなっている。

「私にとってケンイチは私の心をどんどん変えるほどの存在よ……」

ケンイチにとっての私は何なの……？

うつむきそうになる。でも、ちゃんとケンイチの顔を見て言わなきゃ、最後まで。

「私はあなたと対等に付き合いたいの……だからあなたにも変わって欲しいの、好きだから……好きだから対等でいたいの……！」

私の叫びはケンイチの顔を曇らせ、去っていく私は、彼の心に傷

を残しただけだった。

そして。

ケンイチは笑わなくなっていた。私が奪ったからだ。

必ず見かけるのは放課後の図書室。空間はもう止まってない。彼は普通に読むようになった。彼の不思議な読書も、空間を止める力も、私が奪った。

毎日の授業の合間に図書館と図書館の裏をチェックする。知らない人は必ずいて、ケンイチは必ずいなかった。

教室でも、彼はいなかった。本人は先生が来るまで教室におらず、何か避けられているようだった。

別れの言葉を言われるつもりだった。でも、自分から訊くこともできず、ただ、待った。

私とケンイチは終わらないまま、時が過ぎる。

冬

年が明けた。誕生日を過ぎても、中間テストを受けても、期末テストを受けても、去年を思い出すのはケンイチと一緒にいた時間だけ。

私が逃げて、今はケンイチが逃げて、二人は終わったんだ。

何もかもが幻のように思える。でも、ケンイチとの幻を消したのは、私なのだろう。

今はただ、時間が過ぎていくのを見つめることしかできない。

ほんとね、しってたの。

けんいちはんけんいちなりに、わたしをあいしてくれたこと。

でもね。

わたしにはけんいちとおなじぶんだけのあい。
もてなかった。

けんいちもてさぐりだったんだよね？

わたしとおなじようにふかいやみをかんじていた。

相葉洋子 一年（後書き）

えー、青春物書き石崎京悟でございます。

ご意見・ご質問・ご要望などは、賛否かわからずありがたく頂戴したいので、どしどしお寄せください。

相葉洋子 二年（前書き）

帰宅部シリーズ第一弾、帰宅部の女帝「相葉」を描いた三部作。第二作目。

相葉洋子 二年

春

やっかいな事が起きた。

「姉ちゃん姉ちゃん!」

新しく入ってきた一年生。その娘の名前は愛美。私は普通に図書委員の仕事をこなし、普通にそこでの雑談に応じていただけだったのだが、どうやらなつかれてしまったようだ。

迷惑な話だ。私は後輩に親しまれるほどの人間じゃないし、ケンイチとクラスが変わった今でさえ、彼とは顔を会わせるだけで辛いような、自分のことで精一杯の女なのに。

後日、さらにやっかいな事が起きた。

「付き合ってください」

新入生の男子から告白された。しかも、昼休みの図書館で。図書館中の人間から注目が集まる。正直、恥ずかしい。

受けるも受けないも、私は恥ずかしさで閉口し、考えられなかった。

「姉ちゃんはまだ彼氏がいるんだから、駄目よ」

愛美が横から口を挟んだ。内容はともかく、助かった。冷静に対処できる。

一呼吸おいて、私からも断ろうとすると、

「やっぱりそうなんですね。石田さんなんですね」

向こうからもケンイチの名前が出た。言うなり、図書館を出て行った。

どうなってるの……?

疑問が頭を巡っていると、注目も去り、図書館のざわつきは消えた。消え際に周囲から、「やっぱり」という声を残して。

「愛美、どうなってるの?」

「どうなってるのって、石田先輩って姉ちゃんのカレシでしょ？」
否定も肯定もできない。厳密に言えば、別れてないが付き合ってもいない。どちらも意味が同じだ。

「で、本当のところどうなんですか？」

「何が？」

愛美が意気揚々と尋ねてくる。まったく見当が付かない。

「やっぱり石田先輩が浮気したんですか？」

「は？」

「あ、じゃあ姉ちゃんなんだ」

待つて待つて。

私はあわてて、司書室に愛美を連れ込んだ。あの場で聞いたとしてもいいが、図書館中の人間が本を読むフリをして、聞き耳を立てていたのが分かった。皆、不自然に体が傾いている。

「誰から聞いたの？」

念のために、愛美の耳元で囁いた。愛美もそれに応じる。

「噂になってますよ。石田先輩って一年の女子の間で評判になるから、付き合ってるかどうか気になるんですよ」

それで、私の名前が出たのは分かる。でも、それだけじゃ浮気に行き着かない。

「それで浮気って？」

「はつきり言つて、二人が一緒にいたことないじゃないですか。外では知りませんけど」

学外でも、付き合いはないのだけれど。こういう話になると、本当にもう付き合っていないことを実感する。そして、別れてない心の奥から声がする。なんとも言えない痛みが走り、気が滅入る。

「それでどっかが浮気してるって話？」

「はい。石田先輩ってプレイボーイじゃないですか。だから、石田先輩の浮気説が強いんですけど」

ふれいばーい……ねえ。

「ケンイチが？」

「え、だって、他の男子と違って、メチャメチャ女の子と話しますよ？ 軽くセクハラ発言しますけど、優しいし。何より女性の名前を忘れないから、知り合った人にはちゃんと声かけてくれるんですよ」

確かに、ケンイチは女性の名前を覚えるのは早かった。一年の時に、クラスの女子の名前を一週間で覚えたり、一ヶ月で全学年の名前を覚えていた。そのくせ男の名前は覚えが悪く、人気のある男子に半年経っても名前を聞いていた。

今、思い出せばそれも単なるネタだった気もする。ケンイチが間もない頃に、クラスの男子を呼んでいたのを覚えている。正直に言つて、影の薄い男子で私は覚えてもいなかった。（私は男女関係なく、一ヶ月もすればクラスメイトの名前ぐらい覚えられる。普通の方だと思う）

去年と同じことをやれば、今年はそういう評価になるのか。来年もきつと、同じことになるのだろうか。

それはともかく、

「で、どっちなんです？」

この噂話好きそうな後輩をどう処理するか、困った。

そういえばケンイチは変わった。

二年生になってからというものの、欠席が多くなっていた。彼が優等生だったという事もあり、その豹変ぶりに先生達は慌ててケンイチを生徒指導室に何度も呼びだしていた。だが、一向に治る気配は無い。私から見ると、彼の何かが吹っ切れたんだと思う。それが何かはつきりと分らないが、原因は明らかに私だろう。それには何の感慨も無い。私はそれが私の罪だと受け入れてしまった。そしてそれが償いようも無いことを。

図書委員は真面目にやればやるほど忙しい。今日も私は放課後になると、図書館に行つて蔵書整理と生徒の本の貸し出しや返却のチ

エック。愛美も無駄口叩かずに、せつせと働いている。

プリントのコピーが必要で、職員室へ向かった。途中で男子に出会った。

「この前はすいませんでした」

立ちは大かのように廊下の真ん中に立ち、頭を下げてきた。ちょっと急ぐんだけどな。

「いいのよ、別に」

「お話は兄さん……石田先輩から聞きました」

ケンイチは私の兄じゃないけど。この子にとって、兄さんなのかな。っていうか、いつの間にそんな中になってるの。

「オレはそんなつもりじゃなかったんです。あの時は、もし兄さんが浮気してたなら、そんな人よりオレと付き合った方がいいと思つて……」

何かまた新しい話ができてる気がする。しかも、吹聴したのが誰なのか明らかに分かる。

「本当にすいませんでした。オレは……本当に力になれないけど、お二人が幸せになることを祈ってます」

黙っていると、そのまま話を完結させて行ってしまった。あ、コピーに行かなきゃ。

コピーを済ませ、図書館に戻る。今度は誰に会うこともなさそうだ。

ガラス越しの景色を見ながら、来た道に戻る。体育館につながる渡り廊下が見える。体育館の入り口手前の階段に座っている男子が見える。ケンイチだ。

ケンイチがぼーっと座っている。

いい加減、何か話してもいいよね……さっきの子の話もあるし。

図書館にコピーを置くと、愛美に後の仕事をまかせた。不満を口にしたが、無視した。

ケンイチの背後に付けるよう向かうため、校舎内を大きく回って体育館の裏側に出る。

遠回りになったが、ケンイチはまだそこにいた。
鞆を後ろからぶつける。

「何ボケツとしてんのよ？」

何も違和感無く、（こーゆー考え方で話しかける事態、違和感があるんだけど）親しげに話しかけた。

しかし、返事はなく、ケンイチは後頭部に手を当てて震えている。
……あ。

そういえば、鞆の中にはハードカバーの本が三冊と、分厚い教科書類がぎっしり詰まっていた。

「ごめーん！ 悪気はなかったのよ？ ね？ ね？ 大丈夫？」

私は懸命にさする。すると、今度は階段でバランスを崩し、ぶち髪を引っこ抜いてしまった。

「……………！！！」

ケンイチの表情は私の方からは見えないが、思いつきり静止している。きっと今、ものすごい顔をしてるに違いない。

私は取り乱しながらも心配して尋ねる。

「ほ、ホントに大丈夫？」

「ああ、大丈夫……………」

ケンイチは平然と答えた。何か瞳に青いモノが見えるが……大丈夫そうだ。

「……で、どうした？ そっちから話しかけてくるなんざ、珍しいじゃねえか？」

驚いてしまった。

用件を聞いてきたケンイチは、私の知ってるケンイチとは違っていた。例えるなら触っても痛みを感じないほどに厚く形成された瘡蓋。その傷を気付かないフリをしている感じ。

「どうした？」

同じ語句で、今度は様子を尋ねる。どうやら私はかなり呆けた顔をしたらしい。

「あ、いや、告白された男子の事で……」

「ああ……ワリイ、ちよつと嘘言つちまった」

ケンイチの話では私は親の借金で借金取りに付けられてるらしい。それで、ケンイチに迷惑がかかると考えた私は、距離を置くように頼んだ。彼は悩んだ末、私から離れることを決意した。自分がまだ高校生で、お金も無く、守つてやれるような力も無い。また、自分が側にいることで、巻き込まれたときの彼女の苦悩を考えてのことだった。

さつき、私と告白してきた子の話をすると、

「最初は『守る』って息巻いてただけだな……。『本当によく考えて、出来ると思ったんなら証明してから告白しな』って念押しのお陰かな。義理堅くて頭のいいヤツでよかった。ただの馬鹿なら通 shouldn't ないからな」

微笑むケンイチ。私は納得するが、

「よくもそんな嘘を本当のように言えたわね」

デタラメを信じ込ませたケンイチの口に呆れる。

「モノは言い用だからな。警察に捕まっても、口任せで逃げられるぜ」

得意気に豪語。

……やっぱり違う、瘡蓋で本心が全く見えない。

「何だよ、さつきからボーっとして？ 話すのは久しぶりでも、珍しい顔じゃねえだろ？」

「あ……いや、随分と話してない間に言葉使いが変わったなーって私はそのままの感想を言う。中身の違いは言わない、触れられるのを拒絶してるかのように見えたから。」

ケンイチは意外そうに、

「そうか？」

聞き返すと、

「まあ、友達連中とバイトの先輩方が口悪いからな。慣れてく内にうつ感染つちまたんだろ」

今度は苦笑いして説明した。

「なんかさ、おっさん臭いわよ。まるで十年くらい話してなかったみたい」

「……十代の人間にんな事言っくなよ。ただでさえ老けてんのによ、相葉にまでんな事言われたら、傷つくじゃねえか」

「アンタ、そんな事で傷つくタマじゃないでしょ」

「……………」

あ、なんかマズイ事言っちゃったかな……………？

警戒して様子を見ると、プツと吹き出し、

「ははははは……………！ オマエも老けたこと言っなあ！」

「失礼ね！！」

言って私も笑う。二人でしき頻りに笑う。そんなに笑うような話ではない。

この笑いはどっから来たモノなんだろう？

それを問いつめるのは怖ろしくて、二人でただ笑った。

その後、二人で何を話したかは覚えていない。

きつとこれが私たちの『さよなら』。

そしてこれが私とケンイチの新しい『こんにちは』。

それから私とケンイチは再び、放課後の図書館で話すようになった。

そうして、

「誰？」

ある日、ケンイチが連れてきた一年生。告白してきた子だ。

「ああ、茂野って言うんだ。未だに、お前の事が……………」

茂野と紹介されたその子はいきなりケンイチの口を手で塞いだ。

「んー？」

ケンイチはしかめっ面をして抗議するが、

「兄さん、それは言わない約束！」

茂野は小声で注意している。背中越しになんだか懸命なのが分かった。

「んー、ん」

ケンイチは了解したのか、何度も頷いている。茂野が納得して手を放すと、

「んでコイツがお前のことな……」

「兄さん！」

茂野が追っかけ、ケンイチが逃げる。逃げながら、

「相葉のことなー！」

わざとらしく何かを伝えようと大きく口を開き、

「わー！ わー！」

その何かを誤魔化そうと大声で叫ぶ茂野。……もう何が言いたい分かるって。

しばらく走り回ると帰ってきて、

「もー、兄さん！」

茂野が泣きそうな声でケンイチを呼び、

「わーった、わーった。言わねえよ」

ケンイチは茂野の意図を理解する。だが、

「でな、コイツがお前……」

懲りずにまだ言うケンイチ。

「もう、いい！」

諦めて講堂を去る茂野。ケンイチは慌てることなく、私の横に座っている。

「追わなくていいの？」

私は面白がって聞くと、

「ああ、帰ってくるよ。見てろ」

間。

「来ないね」

「あれ？」

ケンイチは不思議がった顔で講堂出口まで様子を見に行く。する

と、

「スキあり！」

出口の横から足が出てきて、ケンイチが蹴っ飛ばされる。茂野が姿を現し、

「やーい、ひっかった、ひっかったー！ バーカ！」

倒れたケンイチにお返しとばかりに貶すと、こっちに戻って来る。「お久しぶりです、茂野って言います。普段は兄さんと遊んでるんですけど、相葉先輩とはまた話がしたくって、兄さんが相葉さんを紹介するって言unnoで、付いてきました」

今までのことは無かったかのように、自己紹介してくる。凄い子だ。……なんか意地悪したくなっちゃうなあ。

「話って、どんな？」

私は声色を変えて、なるべく相手が戸惑いそうなイントネーションで尋ねた。

「え？ いや、その、まあ、色々あって……」

茂野は私のそれが通用したらしく、しどろもどろに言葉を濁し始めた。……面白い……。

「もっと詳しく言って」

甘えた声で言う私。なんか誘惑してるみたいだなあ……。

「いや、そのー、なんて言unnoですかね……そのー」

茂野が真っ赤になって困り果てている時、

「はじめてキャバクラに行った男か、お前は？」

後ろからこっそり近づいたケンイチが、ごきごきごき！と一気に茂野の首をひねる。

「うっわ……」

スゲー鈍い音……。思わず声を上げる私。

「おおおお……！」

茂野は首を両手で抑え、痛さなのか音の凄さなのか、とにかく膝を突いた。

「首の間接を鳴らしたぐらいで、大げさな……」

ケンイチは呆れるが、

「いや、フツービビるって……」

ツツコミを入れずにいられなかった。

こうやって。

二人で話してたら、茂野が来て。

三人で話してたら、愛美が来て。

どんどん人が増えて、いつだったか『帰宅部』と呼ばれるようになった。

帰宅部なら同じ人間はいくらでもいるのに、私たちのグループはそう呼ばれた。

ケンイチがいるからできたモノだろうか、私がいるからできたモノだろうかそれとも、ケンイチと私でできたモノだろうか？

要因はどうでもいい。ここに、みんなはいる。きっと誰かが、私の知らないところで私とケンイチみたいに恋をし、私とケンイチではできなかった支え合いをして、私とケンイチに相談を持ちかけてくるのだろう。

今、時間はゆっくり、そして、早く過ぎていく。

相葉洋子 二年（後書き）

えーすみません。後半、走ってしまいました。
後に主流となる帰宅部のテンションがこんな感じになると思っ
ただければ、ありがたいです。

インターバル

その日は雨が降っていた。私の記憶では始業式の終わった後か、次の日の土曜日だったはず。午前中に授業もすべて終わって放課後の図書館。珍しく私は一人だった。せつかくの一人なんで、帰り途中に本屋にでも寄ろうか。

そんな事を考えながら、だらだらと時間を潰す。なんだかんだで、みんなを待つ自分が可笑しくて笑う。

ふと、外を見る。中庭の方を、見てしまった。

男が二人、雪の積もった中庭で対峙していた。雪？

違う、雨で落ちた桜の花だ。中庭を囲む桜が、落ちて真っ白な絨毯になっていた。

白い原の上で、二人の男が向かい合う。片方は遠くから見ても、ずぶ濡れなのが解った。雨が土砂降りになったのは、一時間前、あれだけ濡れるにもそれだけの時間がある。濡れている男は、ずっと雨の中立っていたのだろうか？

「……！」

濡れていない男の口が動いた。何を言ってるかははっきりと分からない。野次馬気分で窓をこっそり開けた。窓が開き始めるくらいで、

「嫌だ！ 納得できないっすよ！？」

濡れている方が叫んだ。この声は聞き覚えがある。茂野だ。

何で……？

「聞き分ける。後は俺たちの出る幕じゃねえ」

もう一方はケンイチだった。

何で、何で？

「兄さんはどうも思わないんですか？」

ケンイチは何も言わなかった。いや、何を言うか考えていたかもしれない。茂野には余裕が無いらしく、

「……行きます。アイツ、殴るだけじゃ気が済みません」

言いながら、ずんずんとケンイチの方へ、学校の出口へと向かっていった。

ケンイチと交差する瞬間、

「止めとけ」

茂野の首に、ケンイチの腕が掛かる。茂野はそれを強引に払いのけた。

茂野があそこまでケンイチに反発するなんて……。

私を驚かせるのはそれだけでは済まなかった。

再び進もうとする茂野。急に彼の体が後ろへ倒れた。

振り下ろした右手を戻すケンイチ。何を言うわけでもなく、茂野を見下ろしている。

殴った。ケンイチが茂野を……？

そして茂野は起きあがるなり、

「っ……ちつくしょおー！」

ヤケクソにケンイチに向かっていった！

再び殴り飛ばされる茂野。

そのたびに起きあがり、向かっていつては倒された。

「止めて……止めて！」

私は叫び、図書館を飛び出した。長い廊下を走り、角を曲がり、上履きである事すら忘れて、中庭へ踏み込んだ。

「止めて！」

と、叫んだときにはもう茂野は動いてなかった。血と腫れで真っ赤な顔をして、横たわっている。

インターバル？（前書き）

おまけ・言い訳・人物紹介

インターバル？

夕焼けばかりが眩しくて
あの日の影を忘れてた
共にいる友と歩く道
友の分だけ影は伸びる

楽しいことだけ増えてった
悲しい分だけ忘れたい

今じゃ楽しいことは語るけど
悲しいことは思い出す

両手を広げて追いかけた
肩を窄めて恵まれた
大きなものがほしくても
小さなものしか奪えない

隣の消しゴム使ったら
後からジュースをねだられた
あいつにジュースをおごったら
真夜中涙で返された

空の青さに気づくのは
窓辺に席替えされたとき
空の曇りに気づくのは
教壇の前に座るとき

点を稼いで振り返り

後を追われて嫌になる
点が低くて見上げれば
追いつけないとあきらめる

あいつの想いは募ってく
オレへの気持ちは離れてく

昔を思えばつらいけど
帰りたいのはその昔

帰宅部を象徴する詩とってください。

僕が未熟なせいもありますが、作品の時間の流れを軽く説明したいと思います。

帰宅部は相葉洋子、石田ケンイチが卒業するまでが、一連の流れとなります。一話ごとに一年経っています。

これから発表される作品は外伝が二話、本編（最終話）で計三話となります。

外伝は相葉洋子が三年の時に起きた事件です。ここだけは本編との時間間隔を無視していただけると助かります。

（まあ、読んで分かるようにはしてるつもりなんですが、ちょっと自信がw）

以前、発表されたインターバルは本編とも外伝とも繋がるので、あえて分けて発表しました。

正直に言うと、元は外伝が先にできて、最後に相葉洋子の話がまとめてできていました。

WEB小説の特性を利用して、全ての話をちゃんと時間順に描きたいと思って、このような流れに変更されています。

と、ついですが、改めて人物紹介やつときます。

相葉洋子（三年生）……本編主人公。三年生の時点で帰宅部内にとどまらず、校内中に恐れられる女帝。ケンイチとは複雑な感情のまゝ、友人として落ち着いている。

茂野（二年）……外伝1主人公。相葉に一目惚れし、ケンイチに騙され、気付けばケンイチの舎弟的位置にいる。不幸な青春野郎。騙されたことに関しては、今ではどうでもよくなってるらしい。

愛美（二年）……外伝2主人公。相葉の舎弟（妹？）。茂野と逆の立場なワケだが、別に対立しあってるわけでもない。口ゲンカ仲間ではあるが、茂野のことが気になってはいる。というか、どうしようもなく好きなのだが、茂野の告白や、普段からの相葉への態度も見ているので、踏ん切りがつかないでいる。

メイ（二年）……外伝1・2のヒロイン。そして、本編でも裏ヒロインになるという活躍ぶりを見せることになる。人を惹きつける魅力があるが自覚が無く、人間トラブルを引き起こすことが多い。たまに合同写真を撮るときに、「君、もうちょっと前に来て」というシーンがあるが、彼女の場合、写真をとるたびに言われる。老若男女問わず、どうしても気になってしまいう子というやつである。

迫下（二年）……トラブルメーカーになれないトラブルメーカー。
でも、波乱はコイツが持つてくる。外伝1でも、えらい言われようと扱いだが、そういう星の元に生まれたとしか言い様がないほど、どうしようもないのである。気に入った女性は自分の自慢話で口説く、嘘体験談で自己アピールして周囲が退く、めげない。入学早々、同学年に囲まれてるのを、茂野が助けたことで、彼について回っている。茂野曰く「助けなきゃよかった……」苦労してるようである。

石田ケンイチ（三年）……本編・外伝の影の主人公。柴田亜美の漫画に「完全無欠の少年は欠点だらけの大人になる。でも、欠点は克服できるから、人間は面白い」ケンイチは欠点に気付き始めた少年である。彼の現在に至るまでの紆余曲折が本編で語られることは無い。だが、同年代や後輩は彼が「大人」に見えるであろう。それすら、彼の苦悩の内なのに。相葉との関係については、彼女は「内」で処理したが、対して彼は「外」で処理している。それが後にどう影響するか。

インターバル？（後書き）

言い訳とか本来するもんじゃないですよねえ……反省。 06/07
/19にちよつと構成変えました。携帯で見づらいそうなので。

茂野 二年（前書き）

帰宅部シリーズ外伝1

茂野 二年

茂野は授業を受けていた。電車の線路沿いに校舎があるので、時折の騒音が授業を妨害してくれている。

霜が走った窓の側、寒さと騒音の最も眉をひそめるべき場所にいる茂野は、この寒さも騒音も好きだった。先生の声がかき消されるたびに、小気味な爽快感が胸を通って、堂々と授業をサボる気になれる。寒さの方は昔から慣れた物だ。先生もこの電車の音で、やる気がなくなる生徒や茂野ではないが、それを利用して授業を放棄する生徒がいるのを知っているので、注意するだけ無駄だと開き直っていた。

茂野が居眠りを決め込んでいると、隣の迫下が名を呼ぶ。せつかくの眠気を払われて、うざったい視線を向けるが、

「メイの事、知ってるか？」

「このクラスになって半年が過ぎたんだぞ、知らないはずがないだろう、何言ってやがんだこの馬鹿」という表情を茂野は返した。

迫下は分かったのか分かっていないのか、

「アイツこの前、やつたらしいぜ」

下世話なヤツだな、茂野は嫌気が差した。

迫下はクラスで2、3を争う程の嫌われ者で、外見は太っているが、それ以外に問題があるわけではなく、こんな下世話な噂を広めたり聞き集めたりする所が、原因になっている。昔、迫下のそれを知らない女の子が付き合い、舞い上がった彼は有ること無いことを広め回って、一週間もしない内にフラれた。

それでも、

「オレやったら、彼女なんていくらでも作れるわい」

などとめげないのが、みんなの苦笑を呼び、ワースト1位にはならないのが幸いである。

「誰とやったと思う？」

茂野は迫下のこの点は嫌いだが、根は悪い奴ではないと思っているので、

「誰だよ」

いつもこういう話の時は、適当な相づちを打って聞き流していた。

「兄貴らしいぜ」

耳を疑った。

「あ？」

ガラ悪く聞き返す。

兄貴とはケンイチの事で、茂野達の一つ上の先輩である。ケンイチはいつも図書室にいて、いつの間にか茂野は彼と仲良くなっていた。兄と呼ばれるのはその慕いやすい本人の性格から来ている。そして、茂野はケンイチに憧れており、茂野の性格は大分彼に影響されている。だから、

「ケンイチ兄さんが何で……？」

茂野は不思議でならなかった。

「なんでメイなんかと」

メイは美人と評判である。ケンイチとも確かによく話す。しかしそれでも、ケンイチがメイと付き合いうとは考えられない。

「相葉姉さんは？」

ケンイチが図書室にいる理由。それがこの女性。唯一好きだと言いつ、しかも公言してしまっている。しかも相葉も好きという。だが、二人は交際することはない。

「何で付き合わないの？」

茂野は質問したことがある。その時二人は笑い、

「そついやそうだな、付き合いおうか朋代？」

「別にいいわよ」

冗談か本気が分からない。けれど、そんな事をさらり、と言ってしまうほど二人の仲は深くも見える。

茂野は相葉が好きだった。このケンイチとメイの一件は無情にも、茂野に密かな幸運を感じさせたが、このケンイチのらしくない行動

は、茂野に苛立ちも感じさせた。

「やっぱり兄貴はもてるなあ」

迫下のしみじみとした声。茂野は、

「黙ってる」

八つ当たりに、制した。

茂野が葛藤に悩まされる中、昼食のチャイムが鳴る。

「兄さん！」

茂野と親しいメンバーが集まるお昼の図書室。怒鳴り声が静寂を崩す。

そこに蔑みの眼はあるが、返事はない。茂野がもう一度口を開く。兄…

「ころ」

「ごん、と鈍い衝撃のあとに鋭い痛み。どうやら何者かに鈍器のよ
うな物でこづかれたらしい。」

「姉さん……」

振り返れば文鎮を手に、相葉がにやけている。図書委員の腕章が腕組みで歪んでいた。

「あんた、この前も注意されてんだから静かにしなさいよ」

整理中の書類に文鎮を置いた。いや、戻した。

「ごめん、あのさ、姉さん、兄さんの噂聞いた？」

「何よそれ」

「メイと付き合ってるっていう……」

茂野は口に出した瞬間ばつが悪くなり、尻すばみになった。だが、
「へえ、そう」

以外にも、相葉の返事はあっけらかんとしたものだった。先の会
話とさして変わらない、茂野は何か不満が湧いた。

「へえって、何とも思わんの？」

「何を思えっていうのよ」

茂野の苛立ちをものとしな。真正面からそう言われ、茂野は口

ごもった。相葉はいつもこの調子の強気の女であり、茂野もそこが好きなのだが。

「あのね」

面倒臭そうに、椅子に座る。

「いい、茂野？ 私と大悟は確かに前、お互いに好きって言ったわよ。でも、それがどうだって言うの？」

「どうって……」

苛立つように問いつめられる。怒られてるようで、つい下を向く。

「別に彼氏彼女って関係でもないのよ？」

（分かってますよ）

「大悟が誰と付き合おうが、私の知った事じゃないし、それこそアイツの勝手でしょ？」

（だったらお互いに好きとか言うなよ！）

「分かった？」

（分かりませんよ）

「分かりました」

茂野は心情とは裏腹に答えた。言い出せない自分に嫌悪を感じた。

二人の会話があらかた終わり、

「姉さん、キツイねえ」

と、愛美。相葉に唯一文句を言える二年生。大抵、男でも女でも相葉はケチを付けられると、ビンタか罵倒で返されるが、愛美はお気に入りらしく、同性愛と冷やかされる程可愛がっている。

「だって、コイツ「納得いかない」って顔に出てんだもん、説き伏せなくなるわよ」

今だって無理に納得したし、と付け加え、茂野をどきり、とさせた。相葉は時折その一言が鋭い。

「でも、メツチャへこんでるやん」

愛美は心配そうに、言う。茂野は愛美の気持ちを知っていた。しかし茂野は、冗談めいて、

「いや、姉さんがキツイのはいつもの事だし」

確かに落ち込んでいた、苛立ったはずの気持ちを、立ち直ったかのように見せた。愛美の気持ちに答えられない自分がいる、なるべく心配を掛けまいとする心が、茂野の気持ちをリセットした。

「何よ、私はいつだって優しいじゃない」

「あーあ、若いのにもう耳が呆けたんや」

厳しいと優しいの意味は違うのに、そう言いかけた時、

「この……」

「ゴメン、ゴメン！」

相葉の投げるスリッパを恐れ、茂野は飛ぶように図書室から逃げ出した。

図書室を左に、外を右にした廊下を突き進むと講堂に出る。そこは広く、中央にある大きなガラスの天井が秋となった今でも眩しく、優しい暑さを一帯に広げていた。

そういえば、と茂野は思いだす。ここで相葉とケンイチ、初めて二人と出会ったのだ。楽しそうに笑って話す二人。その時の相葉を見、自分もあんな彼女を持ちたいものだ、勘違いしていたが、今、彼氏と勘違いしたケンイチを慕っている自分。何だか妙なことだよな、茂野はほくそ笑む。

ふっと、今の二人のことが浮かんた。少しも変わっていない、憧れて、慕っていく内に変わっていく自分と比べ、明らかに落ち着いている。他の上級生とも二人は異質な雰囲気放っていた。

だから、惹かれていたのだろうと思う。先程叱られたときも、何かしつかりと芯のようなものをもって話すイメージを感じられた。部活動などでも、部長がそんな感じを持っているが、茂野は二人が何にも属さずにその芯を持っているということが、うらやましかった。

（あの姉さんがあんなだけ言うんだから、オレ、余計なことしてんのかな）

だが茂野にとってやはり、あの二人はベストカップルなのだと思う。わずにいられない。相葉の言うことはもっともだが、ケンイチの言

動、行動を考えると同じ男として絶対に、他の女とは付き合えない。茂野はどうしてもその考えを捨てきれない。少しでもケンイチに近づきたい、その憧れの気持ちは今や茂野を頑固にする元になっていた。

（兄さん……そういえば兄さんは何処？）

茂野は講堂から去る、授業開始のチャイムはとうに鳴り終わっていた。

授業に遅れ、説教を喰らい、笑われてる内に放課後になった。そんな午後の授業だった。

「兄さん、今日来てないのかな」

いつも帰るメンバー。今日は五人と少なく、いつもなら十人近くが集まる。部活や、授業の補講などが長引いて、結局この人数になった。下駄箱前である講堂に集まっているが帰らない、茂野が五人目の予定にしているケンイチを待っている。

迫下が笑う。

「一歩違えば、ヤンキーとかチーマーみたいな人だよな」

ケンイチは平気で高校を休む、授業はサボる、煙草は吸う。そのくせ、先生には愛想がいいと変わった人種であった。

「あいつが一歩間違えう事はないわよ」

相葉がつまらなく言う。

「なんで？」

愛美が首を出してきた。

「馬鹿だからよ」

「姉さん、それ、答えになってない」

愛美が笑ったが、相葉は真面目だった。

「アイツは馬鹿だから間違え方を知らないのよ」

なるほど、二人は冗談にとった、茂野には笑えなかった、相葉の言い方に何かの含みを感じた、それが何かはよく分からない。

「茂野、いつまで待つのかな？」

相葉が問う。先と表情は変わらない。

「もう帰るわよ」

そう付け加えて。茂野は黙っていた。

「もう帰ったのよ」

ケータイが鳴る。相葉が応答した。

「あ、ケンイチ。うん。分かった。うん、それじゃ」

「姉さん、代わって！」

茂野が急ぎ、相葉のケータイを取る。通話は途切れていた。

「今、メイの家にいるんだって、教室にいないと思ったら」

どうしようもないケータイを茂野は返しながら、

「兄さん、何してるんですか？」

厳しく尋ねた。その言い草は相葉を非難しているかのようだ。

「だけん、兄貴とメイは」

迫下の横やりが茂野の緒に触れた。

「やかましい！」

迫力に押され、迫下は閉口させられた。茂野はそのまま帰った。

メイの家に行ってみようか、そんな気も起きたが、知らない。探す気も調べる気も起きない。ただ、この苛つきを眠って解消しようと考えた。

深夜、ケータイのメロディが鳴る。茂野は結局眠れずにゲームで夜を潰していたせいで、相手を待たすことなく、通話ができた。

「もしもし」

メイの声。何の用だ、茂野は何となく不機嫌に応答した。今日のことや響いている。メイは気にせず、

「ケンイチさんが」

いや、それどころでなく、同じ固有名詞を何度も呟いている、その声はかよわい悲鳴に感じる。

「どうしたんだ」

茂野はその気配を感じ取った、質問には緊迫感の色が含まれている。

「死んじゃう」

場所は遠いが、自転車を飛ばした。

くたびれた駅の近く、さほど小さくもない駐車場。そこは妙に明るかった。人だかりとそれを遮る警官、ストロボや強めのライトが眼に痛い。茂野が背伸びをすると、そこには白いテープが人の形を模して地面に這っている。その脇腹には、血溜まりができていた。

（「ケンイチさんが……死んじゃう」）

茂野がまさかと顔を青ざめていると、

「茂野」

呼ぶ声がした。

左隣の小さな公園を見る、奥のベンチに相葉と愛美がいた。そういえば、この辺りは相葉の近所だったことを思い出した。暗がりのそこへ行き、軽く手を挙げた。

「何でここにいるのよ？」

いきさつを話し、二人の様子を見た。相葉の顔が曇り、愛美の眼が揺れているのは暗くて、茂野には見えなかった。

ただ、空気を伝わる気配だけで動揺をしているのだと思いこんで、姉さんたちは？」

普通に聞き返した。

あの血溜まりはケンイチのモノだろうか？

聞きたい自分を抑える。もし、口にすれば更に動揺しそうな気がしたのだ。おかげで相葉と愛美の反応がそれだけで無いことに気付けなかった。

「うちらは野次馬よ。コンビ二の帰りにあれが見えたけん」

相葉は人だかりを一瞥しながら答えた。愛美が相葉の袖を掴み、姉さん、もしかしてケンイチ兄ちゃんが」

「ンな事ねーって、兄さんな訳ないやん」

怯える愛美を茂野は笑った。内心、わざとらしいかなと、危惧しながら。

少しの間に沈黙が入った、茂野は何だか気まずくなった。相葉が溜息を鳴らした。

「ま、メイの事も気になるけど、いないのなら、しょーがないわ。ウチ来る茂野？」

「そうね、どうする？」

相葉の意見に愛美も同意する。茂野は行こうか迷ったが、

「いや、なんか気になるから、もうちょっと回ってみる」

逃げ口上をしてしまった。今の状況で、相葉の家で遊ぶなどと、自分の中で気が咎めた。

「じゃあ、付いていこうか？　ウチらも暇だから？」

相葉の問いに愛美がこくり、と同意する。茂野は手を振り、

「いいですよ、こんな時間に連れ回したらそれこそ、兄さんに怒られます」

冗談で断った。相葉は笑う。

「あー、変なトコでうるさいもんねー、アイツ」

相葉が納得したのなら、もう帰ってもいいな。茂野は失礼します、と一声掛けて自転車に乗り込む。

「気をつけんのよ」

「はい」

相葉の注意に返事をし、

「明日学校でねー」

愛美の声に手を振りながら、

（今夜の疑問は明日になれば分かる、メイは物事を大きくするトコあつたし）

そう思いこんで帰った。

「メイの事、知ってる？」

翌朝、迫下の第一声は挨拶ではなかった。

「朝っぱらから何だ？」

茂野はやれやれといった風で、聞き返す。

「おい、真面目に聞けって！……とりあえずこっち来いよ」

お前の存在自体が真面目じゃない、そんな冗談を言いながら、二人は教室の隅に身を寄せた。迫下が肩を掛け、噂だけど、と、前置きを言う。

「メイ、妊娠したらしいぜ」

耳にした途端、茂野は吹き出しかけた。昨日の話と統合すると、

「兄さんの……？」

そういうことになる。

「噂や噂、けど、昨日とか産婦人科の前にいたしな……」

フオローなのか、証明なのか、聞いている側をえらく不安にさせる迫下。

「ただけだろ？ 入ったとか出て来たら、問題やけど」

内心の動揺を抑えながら、尋ねる茂野。

「だったら、メイが（産婦人科を）ジロジロ見たり、急にうつむいたり、兄貴がなだめてたらは変だろ？」

なんで、わざわざそんな細かいトコまで見て来るんだこの馬鹿は。茂野はそう言いたくなかったが、まさか、の声が頭にこだまするのを感じて黙り込んでしまった。

HR開始のチャイムが鳴った。少し間を置き、担当の教師が教室に現れた。皆が席に着き、恒例の挨拶を終えると、

「伊藤、遠藤、加藤……」

出席確認が終わった。生徒の私語も、話を聞く気があるのか、なんとなく静まった。茂野も授業に専念することにした。

「えー、今日、一限から先生の授業があるが、休みになる」

小さなざわめきが走った。歓喜……だな、茂野はそう思って苦笑した。しかし、小さく舌打つ、先生の休講理由は茂野にとって、とんでもないものだった。

「実は夕べ、このクラスの梅井が、警察に補導されたいらしい」

(……………！)

メイが補導された。担任の話では、昨日にあった事件の参考人として、補導された。時間も遅かったので、今日の朝にまた事情聴取のため、出頭することになったようだ。

茂野は昨日の午後といい、今日の午前の授業といい、何一つ耳に入る余裕が無かった。

昼食の鐘が鳴る。

「兄さん！」

連日で、図書室の沈黙を破り、

「昨日も言ったわよ」

「ごん、と今日も相葉にこづかれた。すでに来ていた迫下と愛美が笑う。が、今日の茂野はめげなかった。

「姉さん、それどころじゃないんだって！」

「知ってるわよ」

興奮する茂野に、相葉は冷たく言い放つ。同じクラスの人に聞いたから、と茂野を納得させた。

しかし、結局、相葉はそれを裏切るような内容を口にする。

「ケンイチが刺されたってんでしょ？」

茂野は自分が遠くに行ってしまうような錯覚を起こし、よろめいた。

「何やってんのよ？」

そこまでやるか、と眉をひそめた相葉に、

「オレの話聞いたら、姉さんも同じ事すると思う」

茂野は自信もって返答した。相葉は迫下の噂とHRの話を聞くと、精神性発汗ってホントにあるのね」

頭を抱える。確かに毛穴が開くような感じではあったなと、茂野も同感する。

「分かってくれた？ オレの気持ち」

「すっごい認めたくないんだけどね」

いきなり疲れ果て、腰掛けた机にそのまま突っ伏した。茂野も椅子に座って、前のめりにうなだれる。

そんな時氷迫下が、神妙な顔をする。

「姉さん」

「何よ？ 変な顔して」

やる気なさ気に返答する。

「二人の話聞いてたらさー、メイが兄さん刺したって事なのかなあ？」

茂野と相葉と愛美は一瞬、冷や汗が全身に流れた気がした。

「それ、冗談にしないと。お願い」

「オレも」

二人は悲しい声で頼むが、迫下はまだ考える。

「じゃあ、兄さんは誰に殺されたの？」

『殺すなー！』

「じゃあ」

「いや、もう考えないで」

「聞いて想像するのが辛いから」

相葉、茂野ともう泣きそうになってくる。愛美に至っては、迫下をじっと睨んでいた。

「分かった」

迫下は気圧されたのか、素直に承諾した。

「そついや、お前の方が先に来てるのに、何で言ってねえんだよ」
噂を広げるコイツが珍しいな、と茂野が聞く。迫下はにこりと笑い、

「いや、寝てた。なんか先生の声ってみんな眠くない？」

『お前だけだよ』

溜息をつく三人に、重い午後が流れ始めた。

放課後、三人は気を持ち直して、

「みんな、最近忙しいわね」

今日も都合で昨日と同じメンツで帰る。

帰りの話題は言わずとも知れた物だった。

「ケンイチは今、入院してるわよ。退院は一ヶ月以上かかるらしいって」

茂野がケンイチについて聞いたので、相葉が答える。メイは？そう聞き返して。

「メイの方は明日にでも出てくるって、帰りのHRで言っとった」

「じゃあ、メイが刺した説は消えたね」

迫下は無視された。

「実はケンイチが通り魔に刺されてて、それをたまたまメイが発見して、警察に事情聴取って形が一番いいわね」

と、相葉の仮説。

「結局兄さんは不幸っすね」

「事実が事実やけんね」

茂野と愛美が笑う。

「だったらさ、メイは何で補導されたんかな？」

迫下はまたも無視された。

「最悪はメイがホントに刺して」

「兄さんが、か」

相葉の二つ目の仮説に茂野が続ける。

「もー、止めてよ、二人とも」

愛美が不機嫌に訴えた。

「それ、さっきオレが言った。へへっ……」

迫下は無視。三人の中で暗黙の了解が成されていた。愛美などは、次に言ったらカバンを投げると決め込んでいた。だが、迫下はやつと空気を読めたのか、それっきり口を閉じ、愛美のカバンが活躍することはなかった。

「とにかく明日になったら、メイに聞きましょう」

「そうっすね」

「さんせい」

相葉の案に茂野、愛美と続いた。迫下は大人しく、その話が別の

話題に変わるまで黙っていた。

（しかし、昨日の見通しが甘かったなと、思わせる一日だったな）
ケンイチならばどう考えどう動いただろうか、そんな事を想像しながら、茂野は帰った。

ケンイチとメイが学校に来なくなつて、3日目になった。季節と人が集まらない時間帯とが合わさる中、

（メイはもしかしたら今日も来ないかも知れないな）

茂野はそんな事を教室で考えていた。幾人かが震えている。誰かが平然とする茂野を否めたが、鍛え方が違つと茂野は笑った。

ばちーん！

威勢の良く、何かの音が飛んできた。廊下の方が、何の音だろうと茂野や何人かが扉まで移動して頭だけや体ごとと、各々が廊下に出れば、何人かの人ばかりと、涙ぐんだメイがいた。その足下には、迫下が尻を着いて頬を押さえている。

（ああ、ひっ叩かれたな）

そう理解するには充分の条件と雰囲気を感じられた。

（どうしたんだろ？）

迫下が女子に平手を喰らうのは、普段珍しいことではない。しかし、理由も無く叩かれることも無い。

メイが口を開く、茂野は耳を澄まして、その口の動きを注目した。
「……何も知らないくせに、いい加減な噂しないでよ！」

怒鳴った瞬間、ぼろぼろと涙がこぼれた。女の子のこんな姿は、否応に茂野の胸を締めつけ、周りもシン、となった。

「アンタ、ケンイチさんが何したのか分かつてんの？ 知らないんでしょ、知らないんでしょ……！」

一発、二発、三発と、がむしゃらに両手を振るう。茂野は懸命に防御する迫下の後頭部を見て、気付いた。メイの左手にカバンがあ

り、それで殴っていることに。メイのカバンの端は鉄で補正されている。そんなもんで殴られたら……と茂野はぞっと、危険を感じた。数人をかき分け、

「メイ！ 止めろ」

茂野は厳しく言い放ち、メイの両手を捕まえた。

「迫下！ とりあえずお前も謝つとけ！」

茂野が首を後ろにひねると、鼻血を垂らした迫下が何度も頭を下げる。茂野が肩を動かし、メイにそれを見せる。メイは途端に両手の力が抜け、2回3回鼻をすすると茂野に寄りかかり、小さな嗚咽を漏らして泣き出した。

困ったな……でもとりあえず、と、

「いつまで見てるんだ！」

人払いをし、茂野は人気がない場所へ泣きじゃくるメイの手を引っ張った。図書館の裏、そこがいいと二人は、高めのフェンスと校舎に挟まれた、窮屈そうなスペースの奥に座り込んだ。暗がりのそこはよく、人に言えない相談の場所や、煙がごまかせる事で喫煙所になっていた。

茂野はメイの背中を撫でて、落ち着かせようとする。

「何があつた？」

メイは幾分か落ち着き、声をひきつかせながらも、事情を話し出した。

「……それで夕べね、姉さんから、電話があつたの」

あらかた話し終わり、茂野はただ、聞いていた。メイは大分落ち着いていたが、

「それで、さっきの話をして、迫下の噂とか教えてもらって、私も悪いから、どうも思わなかったんだけど……アイツ、私がガッコに来た時……」

セックスが
「兄貴上手かった？」

って、聞いてきたの。それで、カッとなって」

言い終えると涙がぶり返し、ふさぎ込んでしまった。茂野は黙って聞いていた、何を言ったらいいか分からない、ただ、茫然とすることがなかった。

一時限目の授業は終わっていた。

放課後、茂野は相葉を呼び出し、朝にメイと話した場所に来てもらった。相葉は来るなり、

「メイとあの馬鹿の事でしょ？」

問いには怒りが混じっている。

「そうだけど、姉さん、何怒ってるの？」

茂野はちよつと怯えて、尋ねた。

「頭にも来るわよ」

続けて、

「いくら、メイが元カレにいいようにされてたからって、そのカレシに文句付けに行つて刺されるバカが何処にいんのよ？」

早口に叫び、校舎に蹴りを入れる。

（いや、巻き込まれたってゆーか、首突っ込んだってゆーか……）

茂野はそう思ったが、相葉の機嫌が悪そうなので、思うだけに留めた。

メイは昔の交際相手にセックスを強要されていた。メイも気が弱く、されるがままにされていたのだが、それでも、

「もうやめよう」

と口にはした、しかし、

「うるせえ」

殴られ、暴力で押さえ込まれた。そんな人種に他人を巻き込むわけもいかず、躊躇しているうちに、生理が遅れるという事実が発覚した、元カレに言えば、

「知るか」

と、二度と姿を見せなくなった。それは良かったが、妊娠疑惑は

どうしようもなく、途方に暮れていたメイに、ケンイチが気付いて相談に乗った。ケンイチは妊娠検査の器具などを購入したり、産婦人科に付き添い、メイは泣きながら礼を言った（迫下に見られたのがこの場面らしい）。幸いにも妊娠は無かったが、その日にメイの元カレから電話が来た。

「責任をとるから、また付き合おう」

先の行動からして、メイにとってそれは白々しく、

「嫌」

と、はっきり断る。だが、彼はしつこく、

「会うだけでも」

無理に約束をさせられ、それにもケンイチは付き合った。

メイは、

「信用できないし、ヨリを戻したいとも思っていない」

とだけ言い、去ろうとした。彼はキレて、メイに殴りかかろうとした。が、止めに入ったケンイチとケンカになる。ケンイチは強く、彼は手も足も出なかった。そして、彼は切羽詰まり、

「キヤー！」

ナイフを持ち出し、ケンイチを刺した。

「……………」

血に驚いた彼は、そのまま逃げ出す。そして、立ちすくんだメイ、腹を抱えて倒れたケンイチだけが残された。ケンイチは意識がまだあり、メイに救急車を頼み、担がれていった。その後、ケンイチは通り魔に刺されたと一点張り、メイもそれに合わせた。救急車の来る間にメイと打ち合わせしたらしい。

「でも、オレらが見た事故現場が、ホントに兄さんの刺された場所とか、思わなかったね」

相葉の機嫌が悪いままなので、本人が乗ってきてくれるような話をしてみる。内容が笑えない。

「あと、メイが茂野にだけ電話したのは、ケンイチが救急車の来る

寸前に意識を失って、メイがビビッたからとかね」

言われて、茂野はぎくりとした。特に後ろめたいわけでもないのに、なんだか、そんな気がする。茂野には何故だか解らない。少し考えた結果、それは流して、話を変えることを考えた。ケンイチへの疑問が思い出された。

「元凶は元カレなのに、何であんな事したんですかね」

そう呟く。メイに話を聞かされたとき、この事が一番強かった。相葉がフェンスを見つめる。

「多分、後のカレシの報復を怖れたのよ。少年院とか鑑別所とかに入れられても、ちゃんと更正されるとは思えない、それよかビビッたままの方がいいってね」

だが、視点はもつと遠くにあつた。

「それが一番正しいんですか？」

メイの昔の相手に同情する余地などあつたのだろうか、そんな匂いを含ませて、聞いた。

「そんなの分かんないわ。大人なら、捕まえた方がいいって言うかもしれないけど、あのバカはもつと違うトコで見てるから」

相葉の答えは勿体ぶつたものだつた。

「兄さんは何処を見てたん？」

「知らないわよ。ケンイチがどう考えて方はさっき言っただし、それも合ってるかどうかも分かんないんだから」

（姉さん、兄さんの考えることなんて手に取るように分かるって言ったのに）

「姉さんでも、分からんと？」

「私は茂野と同じよ、付き合う時間が長くても、よく分からない事もあるわ」

どきり、とした。後ろめたいとかそういう類でなく、その言い回しやフレーズに妙に大人っぽい魅力を感じて、だ。そして、一年半近くに及ぶ付き合いの中で、ケンイチがよく分からなくなり始めている自分を見通されたような目が、なんとも言わせない。

「姉さんと同じワケないよ、オレより姉さんの方が知ってるって、同じワケない」

茂野は揺らいだ気持ちを殺して否定するが、
「うるさいわね！」

相葉の逆鱗に触れたらしく、怒鳴られた。

「とにかく、ここまで来たら私の出る幕なんて無いわ」
再びフェンスを蹴りだす。相葉のこんな姿、初めて見た。

「ったく、人の、心配も、放つといて、あの、バカ！」

このままだと開くはずのない穴を、壁に開けそうな勢いである。
何だかよく分からなくなってきたが、茂野はまあまあ、となだめ、

「とりあえず、オレの話は済んだし、そろそろ、みんな集まってる
と思うから、玄関に行こうよ」

などと誘ってみる。こっそり、相葉は以外と子供なのかな、とい
う思いを秘めて。

「先に行つてて、後からすぐ来るから」

茂野は一緒に行きたかったのだが、相葉の雰囲気になんとなく従
い、みんなの元へと歩いた。

「茂野、姉貴は？」

当の問題の人、迫下が其処にはいた。他にも愛美とあと何人が、
その中にはメイもいる。そういえば、メイは何故オレだけに電話を
したのだろうか、疑問が湧く。聞こうとするが、無視された迫下が
邪魔をした。

「おい、茂野って」

じつと迫下を見る。鼻には今朝の件で張られたガーゼと穴に押し
込まれた綿が見える。本人は何だよ、とたじろいだ。コイツのガセ
ネタにも振り回されたのか、そう思うと、痛々しさへの同情よりも、
腹立たしさの方が優先されてきた。

「オレも殴つといった方がいいかな？」

茂野がぼそつとそんな事を言ってみる。迫下は慌て、

「勘弁してくれよ、オレ、朝から「鼻血ブー」とか「高木ブー」とか、ずっとからかわれてたんだぜ！」

そのまんまだと、皆が笑う。迫下が懸命に笑い事じゃない、と言うが、それが返っておかしかった。笑い終わると、再び聞かれる。

「ところで姉さんは？」

「姉さんは後から来るから、待っててって」

『はい』

皆でタイミング良く返事をした。それを見、相葉は伝言だけでも威圧感があるのだなと、茂野は人知れず笑う。

「なあ、兄さんじゃなくて、オレが入院したらどうする？」

と、茂野の思いつきで出た問いに、

「兄さんが笑って見舞に来ると思うわよ、何でも面白がる人だから」と、明るく愛美。

「私は何とも言えないね、ケンイチさんだったらかばってでも止めると思うよ」

静かにメイ。

「兄さんは自分が刺されても面白がってそーだよな」

「うん、どこまでもヨユーありそう」

と、何人が言った。

「オレだったら？」

迫下の意見はくだらなかつたので、誰も聞かなかつた。その後、無駄話に変わっていったが、その中、茂野はメイにこっそり尋ねる。

「ケンイチさんは何でしたん？」

メイは一度、目を下に、考えて、

「多分……アイツだけを悪人にしなくなかつたと思う。ケンイチさんは誰からも憎まれない性格な分、誰も憎めないんじゃないかな」

自信なさげに語った。

「私、ケンイチさんとあんなに長くいたの初めてなんだけど、「自分よりも他人」みたいな考えがものすごく強い人なんだなあって思った」

「優しい人って事？」

茂野が首を傾げると、

「それは茂野の方がよく知ってるじゃない、そんな事聞かれても……」
こっちが困ると下を向いた。メイとしては懸命に答えたつもりだ。
自分よりケンイチと親しい茂野にケンイチの性格みたいな事を説明
するのは自信がない。

茂野としては、

（長く付き合っても、よく分からないから困ってるのに）

と、溜息をついた。メイは少し、辛そうな顔をした。誰も気付かない。

「何の話してるの？」

愛美が二人に寄ってきた。メイが身を引き、三人の円ができる。

「んーと、兄さんの正体かな」

嘘は言ってないよな、茂野はメイを見る。頷き答えた。すると愛
美は腕を組み、

「甘い男なのよ、自分は殺せても、絶対、他人は殺せないの」

と、知った風なことを言った。相葉が言ったことだろう、と茂野
が指す。バレたか、と舌を出して笑った。

「でも昔はそうじゃなかったらしいよ、姉さんが言ってた」

『へえー』

茂野とメイが関心を漏らす。じゃあ、昔はどうなのか、茂野は口
に出し、メイは顔に出すが、

「いや、そこまで聞いてない」

「使えん奴だなー」

愛美の返事に、茂野は心から言った。

「ひつどーい！ 大体、なんでいつも兄さんと一緒にいるアンタ
がそんな事知らないのよ！」

「バカ、男は過去にこだわらないんだよ！」

「まーた、そんなトコばっか、兄さんと似るんだから、汚い！」

言い合いの中、愛美の言葉が茂野の胸に刺さる。表に出さず、

「何言つてんだ、大体そんな事、答られない奴が悪いんだろうが！」と、上手くはぐらかした。

「あんたも人の事言えないでしょ！」

「だから、聞いてんだろうが！」

「何それ！ バーカ！」

「へ！ 言い返せないんでやんのー、お前の方がバカだ！」

「二人とも不毛だから」

口ゲンカになり始めた二人に、メイが恐る恐る止めに入る。

その時、

「あ」

愛美が相葉を発見した。相葉は皆の元に来るなり、

「ケンイチからさっき電話があつたわよ」

そして、

「あのバカ、暇だからみんな見舞に来るように伝えてくれたって」

みんな、おおよその経過しか知らないが、結果は知っている。

「何持つていこうか？」

とか、

「見舞、勝手に食べようぜ」

とか、笑っている。

でも、相葉は行かないだろうな、茂野は思った。多分、自分も行かないだろう、とも。

「何考えて、何やったかは知らないけど、みんなを振り回す人だなあ」

と、誰かが口走り、誰かが、そうだなと笑う。茂野と相葉は苦笑していた。

そのとおり、こっだけ振り回してくれたんだから、寂しい思いをしてる、あんな訳の分からない人は。そう思つて。

愛美 二年（前書き）

外伝1でトラブルを無事に解決できたメイ。その彼女にまた影が忍び寄る。しかし、その影は形すら成していなかった。

愛美 二年

愛美は茂野が好きだ。授業の合間の休み時間、昼休み、放課後、いつでも目に入ってしまう、探してしまう。告白はしていない、茂野が相葉のことを好きだと知っていたからだ。

（勝算のない告白はしたくない）

自分に卑怯さを感じながら、だがそれでも、

「ね、茂野、たまには髪型変えないの？」

そんな質問すれば必ず、

「バカ、これが気に入ってたよ、分かんねーのか？」

そう返して、口ゲンカのキツカケを懲りずに作ってくれる茂野。

（そんな風に付き合ってくれている今なら、急いで求める必要もないかな）

そう考えていた。

しかし、最近不安があった。茂野と同じクラスのメイ。先月くらいにメイが前の彼氏ともめた際、先輩のケンイチが巻き込まれ刺されるという事故があった。その時、メイが電話した先が茂野だった。（ただの偶然かもしれない、自分の思い過ごしかもしれない）

けれど、見てしまった。廊下で泣きじゃくるメイに胸を貸している茂野を見てしまった。

疑う気持ちが膨れ上がる。

『放課後になったら、図書館の裏へ来て欲しい』

そこは高めのフェンスと校舎に挟まれ、窮屈そうなスペース。暗がりのそこはよく、相談の場所や、煙がごまかせる事で喫煙所だった。

呼ばれてきたのは相葉。相葉は一つ上の先輩、同じ図書委員、去年から世話になっていた。面倒見のいい彼女に、愛美はいつの間にか、

「姉ちゃん」

と慕い、仲良くなっていた。そして付き合っていくにつれ、その年齢とは不相応な考え方に愛美は惹かれ、今では一番の親友と思っている。その相葉が何やら目つき悪く、愛美を見つめている。

「アンタ、呼び出すんなら、私じゃなくてメイでしょ」

最も信頼する者からの厳しい声。ぎゅうつ、と愛美の胸が締めつけた、相葉の意見は的を射ている。

「私に甘えるために私の側にいるの？」

相葉は愛美を気に入ってはいる、それは自分の意見が正しいと思つたとき、誰を相手にしても、例えば自分を慕う者の前ですらも、一歩も引かない気概があるからだ。しかしそれは意中の男性を前にすると別になる。

「そんなセコい真似するコなの？」

強い意志を見せる愛美だが、うろたえ、じりじりと引き下がっている。愛美のその様が、相葉の癪に障る。

「今のアンタがメイを呼び出せても、結局後悔するからね」

相葉は言いたい放題に、愛美の意見も聞かず、去ってしまった。

（そんな愛美とまともに話す気はない）

そう言いたげな背中だった。

愛美は一人残され、ただ下を向くばかりだった。

（どうして私はこうなるんだろう？）

茂野に対して、もう一歩前に踏み込めない自分、姉ちゃんの言う通り、らしくはない。姉ちゃんが指摘した、

『呼び出すのは私でなくてメイ』

自分がメイについて相談しようとしたのを見抜かれた。その上、内容が愚痴だと読んだ発言、言い返せない。そして姉ちゃんに言うことで、何かを解決してくれるかもしれない、例えばメイを呼び出して、事の真偽をハッキリさせてくれるとか）

そんな考えがあった。

（セコい真似、と一蹴してくれた分、すっきりした、相葉がそこま

で考えて叱ってくれている)

愛美は確信した。1年以上における付き合いがそれを教えてくれる。そして、

「姉ちゃんの言いたいことが解る分、頼ってるんだ……」

その事実を痛感した。自覚した上で、自分がどうするかを考える。

(メイと話すべきだという事。そうしないとスッキリしない、でも、メイと茂野のことを話すのは……)

(今までの関係を壊すかもしれない)

それは愛美が最もタブー視していることだった。

「それが問題なのね」

だが、

『例え聞いた所で後悔する』

相葉の言葉が気になる。

(どういう事なのだろう?)

愛美は考えるが、その発言の意図だけが理解できていない。俯いてしまう。

「何してんの?」

校舎とフェンスの間に小さく生えた雑草。踏みつけて現れたのは、梅田。クラスの違う、茂野の友人。愛美はあまり話したことはないが悪い印象が持ちにくい男というのは覚えている。

「いや、何もしてないよ」

愛美は口頭を少し、どもらせた。あんな事を考えている時に、人と出くわすのはつい、動揺を呼ぶ。

(迫下だったら無視で済むのに)

そんな心中、梅田は微笑んで、

「もう授業が始まっとうとに、こげんトコにいて、何もないワケなかやろ」

自分たちとはイントネーションが微妙に違う、方言を喋る。愛美は、

(余計なお世話)

思う前に、

「梅田君って、出身地何処だっけ？」

そっちの方が気になってしまった。すると、

「まーた、そげんこつ言うっちゃけん」

不機嫌に頬を膨らました。その動作が不意におかしく、愛美の顔がほころびかける。

「人が長崎の島やけんって、バカにしとろー？」

そのまま見つめてくる。とうとう吹き出してしまった。

（そういえば、茂野がそんな事を言って、梅田をからかっていたな）
思い出し、

（じゃあ私のせりふ科白は確かに失礼だ）

そこまで考えつくと、余計におかしい。

「あ。笑った、非道かー」

（うん、確かに非道い）

そう思ったが、狙ってこぼしたわけではない。

「違う」

口にするが、笑いが込み上げてか細く、聞こえない。

「かー、茂野ン彼女はおとなしか、思おちよったけど、そげん人とは思わんかったー」

ぴたっと、愛美が止まる、それは笑えない。

「……違うわよ」

否定すると梅田は不思議そうな表情をした。

「よく話してるトコは見たんでしょうけど、茂野が誰が好きなのかは、梅田君だって知ってるんでしょ？」

さっきとは違った感じで笑う、偽りと自嘲混じりの。
「相葉さんとかいう先輩？」

顔色を伺う梅田。

（マズイ事を口にした）

そんな考えが受け取れる。

愛美は座り込んで、

「うん……片思いなのよ、私の」

ボソッと、地面を這う蟻を見つめた。下を向くと目に入って、理由もなく見つめたくなった。梅田は何も言わず、煙草を一本、口に
する。

「……何してんのよ」

視線を動かす。

「え、その、煙草ば吸おうかなー思っ
て」

うんち座りになった梅田、

「煙草嫌いなんな？」

気まづくなっていた分、その声は揺れた。

「私にも一本くれる？」

愛美は梅田にとって意外なことを言い、

（何だか妙なことになったな）

梅田は何も言わず煙草を渡した。火を点けると、勢いよく煙を吹
き出す。喉ががりがりする、

（みっともなく咳き込むよりマシか）

愛美は涙目になって再び吸い込む。煙草は初めてだった、今吸う
気になったのは、へいぜんと吹く相葉の事と、

『いい女は煙草ぐらい吸えなきやいけない』

随分前にこぼしたケンイチの言葉を思い出したから、肺に入れて
みたくなった。何だか気持ちが悪い、

（なんでこんなもんが吸えるのがいい女なんだ）

くらりとする感覚によるけるそうでつい、地面に手をついた。

「おい、大丈夫かよ？」

梅田が心配になって声を掛ける。愛美の顔は真っ青になっていた。

「おいおい、大丈夫？」

富山が心配の声を漏らす。ケンイチと同年の男、十八とは思えぬ貫禄の外見を持ち、太い身体で、おっちゃんと呼ばれている。あだ名のせい、割にか、繊細な気性で、そのギャップだか何だかを

同年代にからかわれたりする。

「すいません、心配かけて……」

青い顔のまま、愛美が申し訳なく謝る。保健室に一度連れて行かれたのだが、先生が不在なので、図書室のソファ―に横にさせてもらった。それに原因が原因だけに、不在の方が良かったかも知れない。

そして、たまたま居合わせた富山が、それを手伝っている。

「なーんで、吸ったこともないのに、煙草なんか？」

富山が尋ねるが、愛美は答えない。答えたくなかった、

（うるさい）

言ってしまったかったが、体の怠さが先にあるので口に出なかった。富山は、

（気分が悪くて答えられないのだろう）

と勝手に納得する。

「おっちゃん、何とかできんとね？」

梅田が懸命になっているが、富山は両手を上げてすくめた。

「お手上げ。せめてケンイチとかがおったら、何とかなんだけどなあ……」

読みかけた本を取り、目線を移すと、

「アイツ、雑学王だから、こーゆートラブルはお手のモンやし」

言って、そのまま読書に耽り始めた。

（ケンイチならそのうち来るから、待った方がいい）

自分たちではどうしようもないことを富山は態度で告げている。

ケンイチは愛美や梅田の一つ上の先輩、富山や相葉と同級生である。ケンイチが梅田や茂野、その他学年下の者から兄と呼ばれるのは、親しみやすい性格からきている。その中で茂野は最も彼を慕っており、愛美はケンイチに少し嫉妬もすれど、自分の好きな相手がそこまで心酔する先輩に尊敬も感じていたので、小さな嫉妬がそれ以上に膨らむことはなかった。

具合悪く横になった愛美、どうしようもないと富山、梅田はその

二人を視点に首を振ってうろたえていたが、結局、富山の意見に同意して本を読むことに落ち着いた。だが、愛美をちらりと見るとやるせなく、結局、側で愛美を見つめていた。

秒針が何度回っただろうか。愛美の意識は未だ朦朧としていた。図書館の扉が開き、聞き慣れた声がする。ぶっきらぼうな言い回しで、親しみを感じる声、それは富山と梅田の言葉に混ざり、愛美の近くまで足音と共にやって来る。寝かせた身体を起こし、深呼吸、冷たいジュース、深呼吸と繰り返し要求される。途中、何か錠剤のような物を飲まされる。

（すっばい）

そう思う内に、頭の中で重くのしかかったものが、すうーっと抜けていく感覚。愛美の気分はどんどん透明になる。

目を開けると、

「兄ちゃん？」

富山と梅田だった。二人は愛美の顔を覗き込んで、笑っている。

富山は、

「オー、起きた起きた」

と感心したそぶり、梅田は視線を移し、

「すげー兄ちゃん、言ったとおりやん」

愛美から右の方向へ賛美する。愛美もゆっくり顔を向けると、ブレザーの裾が出入り口に消えていくのを見た。梅田はそれを、
「あれ？」

首だけで追い、

「兄ちゃん、何処行くの？」

呼びかけると、

「アイツ、相葉探してンだつて」

富山が答えた。聞くと梅田は顔を苦め、

「かー、昼間っから女の尻追っかけて、何しようとかいな？」

それを聞いた富山が笑う。

二人の会話で、愛美はケンイチが居たという事を確信した。急い

で、図書室を出る。廊下は左右に長く、一人として姿はない。

「どうしたん、ケンイチに用事やったんか？」

背後の声、梅田に言われて気付く。

（私は何の用があったんだろう？）

呼び止めて何かを聞いて欲しかったの？）

思うが、そこに行き着いた途端、愛美の中に自己嫌悪が起きた。

「ちよつとグチ聞いて欲しくって」

梅田に返事を返す。笑って返したが、今にも切れそうな理性の糸は鉛を乗せて、愛美の心に痛みが走る。

（姉ちゃんが駄目なら、兄さんか……私は何て、女だろう。）

今すぐ泣き出して、大声を上げればどんなに楽かな。でも、それは何の結果も出さない。気を晴らすよりも、今は自分の迷う事に踏ん切りを付けなきゃいけない）

愛美はうつむきかけた頭を速く、起こし、

「梅田君、心配かけてゴメンね。おっちゃんにも言っておいて」

歩き去る。うつすらと目尻に溜まった涙を、梅田に見られたことにも、そのせいで梅田が何も言えなかった事にも、気付かなかった。廊下を進むと講堂に出る。広く、中央にある大きなガラスの天井は冬を伝えたがっているように、雪の存在を見せた。

（そつえば）

立ち止まり、思いだす。ここで茂野を見たことを。相葉と知り合って間もない頃、メイと二人で次の授業の話しながら、講堂を通ると、ケンイチと楽しげに話す茂野、その時メイは、

「茂野君と話しょー人、カッコよくない？」

ケンイチに興味を持ったが、

「そやね」

いい加減な相づちで流した、愛美にとってははこの時の茂野の方が気になった。茂野がケンイチを見る目は、

（私が姉ちゃんを見る目と似てる気がする）

強く印象づいた。そのうち、相葉がやってきて、その二人と雑談

し、愛美にも声を掛けた。二人は話に参加したが、驚いたのはケンイチと相葉の奇妙な関係だった。

「お二人は付き合ってるんですか？」

メイがケンイチに質問すると、

「そっぴやそっぴやだ、付き合おうか朋代？」

「別にいいわよ」

冗談か本気が分からない。

（そんな事をさらり、と言ってしまうほど二人の仲がいいのかな？）

二人のやり取りを、茂野がやつぱりといった風に、

「兄ちゃん、絶対それ言うと思った」

ニヤけた。クラスでは無愛想なイメージと全然違う、今、初めて会った人のようなギャップが愛美の気をさらに惹く。

気付けば、いつでも目が茂野を追っていた、探していた。そして気付いて、悩んだ。

（昔、中学校の頃の恋愛感情と何か違う、私は茂野の事が好きだから気に掛けているだけだろうか）

愛美は何気に深呼吸をした。冷えた空間に白いもやが現れ、消える。

愛美はこの気持ちを怖れている。

（これは欲情ではないだろうか）

茂野のことを考えると、淫らな自分が想いの影に存在する。茂野と一つに繋がろうと画策する自分が居る。

（私はそんな女じゃない）

否定するが、

（この頭を、胸をよぎっているものは何だろうか？）

愛美は苦しんでいた。それは茂野が相葉の事を好きと知っている今でも、変わらない。

「茂野もこんな感じで姉ちゃんを見てるのかな」

独り、つぶやく。茂野を一瞬軽蔑しそんな心が出てきたが、自分

にそんな権利はないと、口を一文字に閉じて講堂に背を向けた。

「メイ」

ホームルームが終わる。クラスの大勢が教室を抜け出るざわめきの中で、愛美は教壇に向かって声を掛ける。黒板を拭くメイが、振り返った。

「それ終わったら、相談があるんだけど」

メイの右手を指し、

「待ってるからね」

大勢に紛れて教室を去った。メイは、

「返事も待たずに行かないでよ、場所も言わないでさ……！」

拗ねたが、

（急な用事でもあるのだろう）

大して気もせずチョーク白墨をこすり取る作業に集中した。

メイは愛美とよく相談し合うが、今の彼女の微妙な雰囲気の違いにメイは気付かなかった。

日直の仕事も終わり、

「先生」

職員室で日誌を担当に届ける。担任はやや脹れた腹をしやりしやりと掻いている最中で、

「おお、ご苦労さん」

メイの存在に慌てながらも、笑って受け取る。

「お腹痒いんですか？」

メイが聞くと、教師はバツ悪そうに苦笑し、

「なんかなあ、蚊に刺されてなあ」

自分の聞き違いかな、メイは、

「蚊……ですか？」

妙なことを自分は聞いているな、と顔をしかめた。

「夏やなくても蚊は出るんやで」

教師に言われ、

（言われてみれば出てきたような……そんな気がする、いやでも……）

メイが思考を巡らせていると、

「嘘や」

教師は意地悪く、舌を出した。その教員らしからぬ行動にメイは笑い、手で突いた。

「癖や癖。わざわざ聞くなや」

中西も笑う。笑うと、今日の学校生活、最近の学校生活、クラスの授業態度などの話をし、

「ちゃんと勉強するんやぞ」

決まり文句を受けて、職員室を出た。

（愛美が相談といったら、あそこかな）

メイは次の目的地を決めた。

「待った？」

図書館の裏、高めのフェンスと校舎に挟まれた、窮屈そうなスペースの奥。午前中、愛美が相葉を呼びだした場所である。

「ちよつとね」

案の定、愛美が待っていた。

メイが悪気無く笑い、

「ゴメン」

聞いて愛美は、

「気にしてない」

ぞんざいなやり取りが行われ、沈黙の間が開く。

愛美はじつとフェンスの方を見つめていた。

（言い出しにくいような深刻な問題なのかな）

メイは愛美が言い出すまで待つことにし、その内容を予想してみる。

（茂野のことかな、そうだろうな、他に何かあっても愛美は自分で解決しちゃうし）

今までの相談の経歴が、勝手に決めていた。

（だったら……）

「もー、そんな深刻な顔して、どうせ茂野のことなんでしょ？」
明るく言う。

（「そんな簡単に言わないでよ」

きつと愛美はそう返してくるわ、機嫌悪そうにね）

メイは愛美が自分の予想通り返して来るであろう反応を、にこり、微笑んで待った。

ところが、

「愛美？」

愛美の顔を見て、メイの顔色が変わった。

愛美が泣いている。

「どうしたの、何があったの？」

（違う、何も無いの）

言いたいのが声にならない。メイが愛美を思ってた、さっきの
科白。

（メイは何もない、私の思っているような……）

さんざん疑って、呼び出しても、聞き出す前に解ってしまった。

相葉が最後に言い残した後悔とはこれだったのだ、

（姉ちゃんはそこまで解ってて……）

頬を伝う涙が悔しい、歯ぎしりするが、音を轢き出す位の力は顎
にはない。握った拳の方に爪が痛々しく、くい込んでいる。

「愛美って、何か言ってるよ」

メイは優しく肩を揺さぶるが、愛美は情けないと思っただけだっ
た。やっと口から漏れたのは、相葉への非難。

「姉ちゃん……ひどいよ」

（何で、そこまで言ってくれなかったの？）

唇がハの字に歪んでいくのを感じる。この気持ちをぶつける相手
は決まっている。けれども、今は、胸を借り、泣く自分と頭をただ
撫でるばかりのメイとの快さに、

（今だけ、今だけは）

憎悪を抱きながら、甘えた。

（姉ちゃんは何故？

こんなに辛い思いをさせてどうしたいの？

私はこれからどうすればいいの？）

愛美は一人、ベットに身体を投げたまま考える。

気だるい、指一本を動かすが、今はとんでもなく大変な作業に感じる。

（結局、メイには何も言えなかった。

でも私は明日から、いつも通りにメイと話せるとは思えない。

茂野にも、姉ちゃんにも、兄ちゃんにも、他のみんなとも話せないだろう）

瞼を閉じる。

（私は、どうすればいい？

誰かのことを考えれば、別の誰かがどうでもよくなる。

考えるのを止めれば、全てが正しい加減に思えてくる）

「さっきみたいに泣こうかな？」

メイに泣きついた自分を思いだし、独り言。

目尻がじわり、濡れ始めた頃、

（日に二回もなく様な甘ったれじゃない）

強く瞑り、こらえた。

（人を好きになるって、こんなにややこしい事だったかな？

茂野が他の人が好きだから遠慮する。何て臆病なんだろう私は、何て臆病なんだろう茂野は。

何なのだろうあの二人は。

周りの気持ちを考えず、白とも黒ともハッキリしない。

でも、その二人に惹かれたのは誰？

二人のその部分を魅力とさえ感じたのは私）

寝返りをうち、目を開いて、天井を見た。ギザギザの模様が愛美の視界には揺れていた。

（何かしたい、誰かになりたい、茂野としたい、茂野と話したい）
今、とてつもなく茂野の声が耳に欲しくて、切ない。

茂野のPHSが鳴る。

「もしもし？　愛美？」

いつもの茂野の声。胸が落ち着くようで、ときめくような、甘い
感覚を愛美は感じた。

「うん」

涙ぐんだ音で茂野の耳に伝わった。

「どうした？　何かあったのか？」

心配そうな茂野。思わず、

（想いを全て吐いて、寄りかかれたら楽なのに）

それは無理だと分かっているながら、考えてしまふ。再び自分が情
けなくなる。

「ううん、やっぱり何でもなーい」

作った明るい声を茂野にぶつける。

妙な態度の移り変わりに、

「何かあったんじゃないのか？」

「んー？　心配するかなと思って」

茂野の疑問を演技で一蹴した。気付かず、

「なんだよ、そんな電話するなよ」

笑って叱った。

「あはは、でも気付くんだねー、エライエライ」

「何言ってるんだ、用事が無いなら切るぞ」

「あ、待って」

不意に止めてしまった。

「何？」

別に言うことはない。

「明日の授業、宿題有ったっけ？」

「無いよ、じゃ、また明日」

茂野が電話を切る瞬間、

「茂野、私のこと…」

どうおもってるの？の声は、

「兄ちゃん、ちょっと待ってよ！」

かき消されて、ツーという音が何度も鳴り響いた。

（兄ちゃんと一緒なんだ。なんか、ムカツクー）

愛美は電話を掛け直す。

「あ、もしもし、姉ちゃん？」

相手は相葉。

「ちよつと聞いてよー。どうして男ってさ、こっちの事情も考えずにさ、目先の楽しいことに走んのー？」

一部始終を説明され、相葉は笑う。

「愛美の心中を察して、長く話して欲しいって事？」

そりゃ、アンタ、甘えてるわよ。それに男はね、目に見えるものが優先されやすいのよ」

言い放つ相葉に疑問を持つ。

「え？ でも前、夢とか理想とかそういうのを重視するって言うってたやん、あれって見えない物でしょ？」

過去の話を持ってこられ、相葉は考えた。その顔は楽しそうである。

「愛美はさあ、男を単純に見過ぎよ。周りは単純単純って言っけど、こっちが複雑なように向こうだって複雑なのよ」

（姉ちゃんの意見の中では意外だな）

「男を単純って言っ女はね、男の複雑な部分に触れたことがないのよ。そりゃ、上辺だけで左右される男がいるから、そうなるけど、その逆だっているじゃない？」

「メイとか？」

愛美が例を出す。

「そうそう」

相葉が同意する。メイは以前、いい加減な男に左右された事がある。

二人でメイを笑いながら嘲った後、相葉が続けた。

「だからさ、基本的に『どーして男は』じゃないのよ。『どーして女も』なのよね」

「お互い様って事？」

愛美の受け取り方に相葉は唸る。

「私その、恋愛でお互い様って嫌いなよね。例えばさ、彼氏が浮気してさ、問いつめたら、『お前だってこんな事した』とか言うじゃない、でさ、ケンカの挙げ句、その常用句よ。なんか嫌じゃない？」

聞かれて愛美は困る。そんなケンカをしたことがない。

（でも、想像してみると嫌だね。結局それで済んじゃうのは…）

「うん、言われてみれば」

「でしょ？ お互い様って言葉は逃げ口上なのよ」

言い切る相葉。

けれど愛美は、

（どちらに対してなんだろう？）

「女の？ 男の？」

「お互いに決まってるじゃない。どっちかにさ、非があつて別れたりしたらさ、『向こうだつてあそこが悪い。だからお互い様だ』つて、自分の慰めにも使われるしね。そうなったら、終わりよ。次の恋愛にもそんなのが出てきて、悪循環を繰り返して、諦めてしまうんだから」

疑問が湧く。

「姉ちゃんはお互い様って、今、使ったよ？」

「バカね、使い方の違いよ。そんな揚げ足とつてたら、私は一生、其の言葉を使えないじゃないの」

（スゴいな、姉ちゃんは。何で断言しちゃうんだろう？）

「なんでそんなハッキリ分かるの？」

愛美の問いに相葉は柔らかい声で、

「そつ言うことをしてきたからよ」

「もしかして兄ちゃんど？」

愛美はそれをからかい気分で探った。

相葉は静かに笑い、

「ケンイチとはそうなる前に別れたわ」

愛美は意外な新事実を聞いてしまった。

「姉ちゃんと兄ちゃんって、やっぱり付き合ってたの？」

相葉は一瞬、考え、

「言って無かったっけ？」

素朴な疑問を漏らした。

「だって聞けないじゃん、『付き合ってたの?』って聞いたら、兄ちゃんは『付き合おっか?』って言い出すし、姉ちゃんも『別にいいわよ』って二人とも素で言っちゃうだもん! そんなんで前の事とか聞けないよ」

勢い付けて言う愛美。さらに、

「じゃあさ、じゃあさ、今兄ちゃんが『付き合おっ』って言ったらどうすんの？」

前からの疑問も出してみた。

「別にいつかな」

相葉は普通に答える。

「うそー! じゃあ、兄ちゃんが言わなかったら、姉ちゃんから行く?」

「何一人で盛り上がってんのよ」

勝手に興奮しだした愛美に、おかしくてつい、注意する。

「それはないわね。ケンイチはさ、考え方がおっさんくさいから、女からの告白は絶対させないし、好きでもない女からされそうになると、どっかに逃げてやり過ぎすから」

「なんか兄ちゃん、かっこいいね」

愛美が思った通りを口にする、

「単なる時代錯誤のバカよ」

相葉がさらり、一瞥する。

愛美は言葉を失うが、
(やっぱりこの二人はすごい)
頻りに感心していた。

通行中の道には桜のつぼみが見えている。

登校中に集まった人間は1ダース、三つぐらいのグループに分かれ、狭そうに歩道を歩いている。

「もうじき三年生かー」

茂野が呟いた。その周りには相葉、愛美、メイ、迫下、梅田、富山。

「そーいや、そろそろ卒業だよなー」

茂野の呟きに、富山が相葉へつなげた。

「あのバカは留年しようかなとか行ってたわよ」

「兄ちゃんが？」

メイが笑う。そこへ

「そしたら兄ちゃんさ、一緒に俺と族(暴走族)やって、一花咲かせるんだぜ」

迫下がしゃしゃり出るが、いつものように話題がついていけないので無視され、

「あー駄目駄目。留年しても、俺が追い出すから」

梅田が得意気に断言する。

「梅田、まだ根に持ってるの？」

茂野は以前、梅田がケンイチからさんざん田舎者呼ばわりされたことを指摘する。

「違うつて、兄ちゃんこの前、迫下と俺、呼び間違えたんだって」
言い返す。が、

「何だよ、結局根に持ってるじゃん」

富山が笑う。周りもニヤついている。

「みんな何だよ、俺が逆恨みしてるって言いたいのか？ ああ、そうですよ。逆恨みですよ、へー！」

いじける梅田だが、それが滑稽なので、結局みんなに笑われてしまう。

「みんな、梅田いじめちゃダメだよ」

いきなり藤田が割って入ってきた。梅田とは同じクラスの親しい間柄である。

彼はおっとりした口調で、非道いことを言う。

「優しい目で見てやろうよ、こいつはただの田舎者なんだから」

どっと、弾けるように笑い声が起こる。

「おまえ、ちゃんとフォローしろよ!」

梅田が藤田につっかかるが、

「え? だってフォローする義理無いモン」

さらっと言つてのける藤田。藤田の口の悪さはケンイチと互角といわれている。

それを受けた梅田は先頭に立って、周囲の人間に向けて、

「お前ら、みんなサイアクだ!」

走って去ってしまった。

「待てよ梅田!」

数人が追いかけて、捕まえる。

そして

「う・め・だ・う・め・だ……!」

何故か梅田コールが湧き上がり、

「何で胴上げてんの?」

相葉や他一同を呆れさせていた。

勝手に盛り上がってる梅田連中を脇に、雑談しながら通り過ぎす

相葉達の中で、メイが愛美に気付く、

「愛美、どうしたの?」

愛美は先程から何も喋ってはいない。周りもそれに察し、体調でも悪いのかと不安げな顔で注目した。

「うつん、何でもないの」

(姉ちゃん達がいなくなつた私たちは、その後、どうなるのかな?)

言葉には出せない、ただ一つの疑問が、茂野の進級を示す口振りで起こったそれが、怖ろしい。

（姉ちゃんがいらない。それは学校で、頼りにする人がいなくなるということ。きつと、茂野も同じ。兄ちゃんがいなくなれることを茂野はどう思っているんだろう？）

愛美はこれから先、自分がどうしていけばいいのかを悩む。

メイは知らず、

「姉ちゃんは卒業したらどうするの？」

相葉の将来を探ろうとする。

（何言ってるの？ いなくなっちゃうんだよ！ どうしてそうバカな事が聞けるの？）

愛美にとっては脳天気な質問に受け取れた。しかし、聞きたいことでもあったので、何も言わず耳を傾けた。

「就職よ。冠婚葬祭の会社に」

相葉はとつくに進路を決めていた。

「へー、姉ちゃん進学しないんだ？ 頭いいのに」

メイにとってその答えは以外で、

「頭よけりや進学しなきゃいけないって道理もないわよ」
相葉にとつては当然の行動だった。

富山は苦い顔で、言う。

「何だよ、決まってねえの俺だけかよ」

「アンタ、卒業まで後2ヶ月つてのに何やってんのよ」

富山のもたつきに相葉が非難を投げる。

「んな事言つたつて、受ける会社受ける会社落っこっちゃうんだもん、しょーがねーべよ」

すねる富山を、

「そついや、兄ちゃん今日が大学受験だよね」

茂野が思い出し、口にする。そこに、

「え？」

波紋が起きる。ケンイチが朝からいないのは日常茶飯事、

「社長出勤の男」

と噂されるほどのので、この場に存在しないことに違和感はないが、まさか受験とは。

「兄ちゃん、進学するの？」

「嘘、聞いてないよ？」

と、メイと戻ってきた梅田。ケンイチから何も聞かされていないことを物語る。

茂野も、みんなが知っているとはかり思っていたので、この反応に戸惑う。さらに、

「どの大学？」

相葉が言つと、

「え？」

さらに周りが驚く。

「姉ちゃんも知らなかったの？」

茂野が代表したように言った。

「進学するようなことは言ってたけど、どこに行くかは聞いてないわよ」

その答えは不機嫌そうに、愛美は聞こえた。

「誰にも行き先言わんと、なーにやってんのケンイチは？」

眼を細める富山、普段が細いので、閉じてるようにも見える。

「富山、何寝てるの？」

「やつかまし！」

周りの感想は賛否両論でざわつくが、茂野はとりあえず話を進めた。

「河村大学に行くって言ってたよ」

「聞かないわね……」

相葉が呟く。少し、考えて。

「東京のバカ大学だって」

茂野はここがどんな大学かは知らないが、
(俺の行くような大学だからバカ大学だ)

ケンイチに説明を受けた時のこの答えをかいつまんで伝えた。

そこにいた皆は茂野の表現を、ケンイチがそう言ったのであるうと、何となくに察し、

「東京か―」

「こつちに帰つてくるときにおみやげ頼もつかない？」

地名の方だけに話題を持つていった。口々に東京への感想や流行の店を話していると、愛美が、

「でも都心に行くつて兄ちゃんらしいよね」

皆もそう思っているであろう事を言った。

だが、

「何で？」

あろう事か、茂野がその事に突っ込んできた。今までの会話の中、最も意外な声で。

愛美は戸惑う。

（何でだろう？ 私は今まで兄ちゃんを見て、話してそう思ったから言っただけだ。茂野に返す答えはこれじゃない、多分……）

答えは出た。言えば、何かが起こるそんな気がしてならないが、

愛美は覚悟を決める。

「アンタはいつつもくっついてるから、そういうトコが見えないのよ」

（言っただ、言つてしまった。私にとって茂野への、ある意味最大の助言、ある意味最大の非難。受け取り方次第で、茂野は私を好きになることはないだろう、私に向かって『愛してる』とは十年経つても言わないかもしれない）

愛美は茂野がどう返すかが、そのほんの少しの間に様々なことを考える。

（茂野の目がうるたえてる……まさか、朝からこんな事を言われるとは思わなかったでしょう？ 私もまさか、朝からこんな事を言うことになるとは思わなかった。でもね、さっき私思つてたの、私に姉ちゃんがいなくなるように、茂野も兄ちゃんがいなくなるのよ？

それがどういうことか、私の今の言葉にあなたが返すことで分かるような気がするの)

茂野は閉口し、ちよつとだけ、上を見る。考えるときによく出る彼のクセ。愛美にはとてもスローに見えた。

(お願い、私への非難でもいい。何か言つて!)

茂野の口が開く。

「そつか」

愛美の、その瞬間までの、時間が普段に戻る。

周りの歩みは早く、愛美が早歩きでなければ追いつかない、いつものスピード速度。

愛美の思考が一瞬止まり、足取りも止まり、皆が遠く離れていく。茂野も。

目に映るその場景が頭に伝わる。置いて行かれる自分に、慌てて、思考する以前に、

(待つて)

無意識に急ごうとするが、自分の意志と身体と感情はバラバラで、上半身だけが前に出ただけだった。

(そつか… って、『そつか』 って何? 『そつか』で済ますの?

兄ちゃんどころか、あなたの好きな姉ちゃんもいなくなるのよ?

『そつか』で済むの? 分からないわ、茂野! そうやって済ませられる、あなたが!)

愛美はゆつくりと、

「… 茂野はこの2年間を幻とも思っているの?」

声は小さく、愛美は皆の最後尾で、誰一人としてその問いは届かない。

メイが、いつの間にかに愛美が遅れていることだけに気付き、声を掛けようとするが、

「ほつときい」

相葉に制され、雑談に戻った。

足の遅い愛美が校舎に入ったのは、

（鐘が鳴る。さよならの時間を一つ一つ告げるように。先輩達との2年間は、時間は、なんだったのだろう…）

始業のチャイムが鳴り終わる頃だった。

愛美が下駄箱を開くと、中には端の乱暴にちぎれたルーズリーフが一枚。

殴り書きのその字を、読む。

過去は速く

濁流ばかりを見つめ

現在は早く

清流ばかりを探し

未来はゆつくりと

何の色を施すこともなく流れている

誰が送ったのか、名前は書いていない。

（姉ちゃんかな？）

愛美の記憶では、この字と相葉のそれとは当てはまらない。だが、（誰だろう。人が落ち込んでるのを見計らったことだろうか、キザな事をするわね）

犯人がどうこうよりも、こんな行為をしてくる人間が自分の周りにいることが笑えてくる。

「バカな奴がいたのね」

思わず微笑んで独り言。一人笑っていると、

「愛美さん、何しよつと？」

ひょいっと、梅田が下駄箱の端から顔を出した。

（待っててくれたんだ）

急ぎ履き替え、廊下に飛び出る。

梅田に礼を言おうとすれば、

「行くよ！」

そんな間も無く、手を引っ張られた。驚きながらも、

「ちょっと、そんなに引つ張らなくても自分で行くわよ！」
梅田に文句を付けるが、

「あー、うるさいうるさい」

彼はお構いなしに走っていく。

（強引な人ねえ……）

思いながら、愛美も足を速めていくのだった。

愛美 二年（後書き）

外伝1・2の読破ありがとうございます。

この二つの話のコンセプト、ご存知でしょうか。
「シルエット兄さん」です。

うまく隠れてるといいのですが。

相葉洋子 三年（前書き）

帰宅部シリーズ第一弾。三部作最終話。

相葉洋子 三年

夢が終わる。私は今の現実に向けて、目覚め始めた。
「なんでこんな夢を」

卒業式

朝、ホームルームが始まる前。

「ケンイチ」

机に伏せて眠る男をたたき起こす。

「ツてーなあ……」

ケンイチは寝ぼけ眼で、起きあがる。

「アンタ、卒業式って言うのに緊張感無いわねー。いつもと変わらないじゃないの」

「何を卒業するんだよ……」

「高校よ」

ケンイチは目を丸くする。

「え？ 今日だっけ卒業式!？」

「おいおい……」。

「おいおい！ まーだ寝呆けてんのかよ？」

同じクラスの富山が笑う。

「いや……卒業式の練習はよくやったが、まさか今日だったとは」

「……本気で知らなかったな……」。

「まあ、アンタらしくていいけどね」

「どういう意味だよ……!」

「言われた本人が笑っている。」

「そういう意味さ」

「うわ、富山までそういう事言うし……オレはよっぽど抜けてるよ」

うに見えてたんだな」

ケンイチはしばし考えて、

「よし、これからの学校生活はしっかりやっていこう!」

「だから卒業式だって!」

ぱんつと、馬鹿なことを言うので、富山と三人で突っ込む。

は?……三人?……ぱん?

「てめ……!」

ケンイチが振り返り、ほぼ同時に私も隣に視線を移す。

「渡辺?」

別クラスの渡辺がいつの間にか来ていた。身長は高い方、人を食った様な顔と何かズレてる性格が特徴で、ケンイチとはよく口喧嘩される所をよく見る。

「おう、お早う」

爽やかに笑って挨拶する。いや、お早うじゃなくてその手に持った……

「お早うじゃねーよ、どっから出したそのハリセン?」

ケンイチが叩かれた頭をさすりながら問う。

「鞆の中に忍ばせて」

言って渡辺は鞆にそのハリセンをしまい込む。

「んなモン持つてくるなよ!」

「お前だって、携帯灰皿とか持つてんじゃねーか」
平然と返す渡辺。

「それは違うんじゃない?」

私が首を傾げると、

「携帯灰皿ぐらい誰だって持つてるだろ!」
ケンイチが渡辺に反論する。

……それも違うんじゃない?……?

……もー、突っ込むのも面倒臭い。

「だから、携帯ハリセンだっていいじゃん。便利だよ?」
いつだってツッコミ入れられるし」

「だーからー！」

ケンイチと渡辺が意味のない論議が始まる。私はその議論に参加するのもウザいので、

「価値観が違うのかな？ 単にバカなのかな？」

「いやー、両方だろ」

富山と二人で渡辺の思考を推理していた。

「同じクラスの連中もいつかはあんな感じになるの？」

「んー、そうだろうなあ、アイツと同じクラスだし……」

富山は重々しく頷き、私は反論する。

「それじゃ、ウチのグループの大半がそういう事になるんだけど……」

……

富山は考える間を置いて、

「あ……」

一言。悲痛な顔で言い合う二人を見つめるのだった。

その頃、ケンイチと渡辺は、『ハリセンのツッコミ方とボケの反応の仕方。その角度と重さ』について、本を出しかねない勢いでデイスカッションしていた。

なんだかなあ……。

そんな緊迫感のない中、卒業式が始まった。

「三年A組、川上明」

誰かが名前を呼ばれ、

「はい」

返事をして壇上に登っていく。ステージの真ん中で待つ校長に渡された卒業証書は危険物のように扱われ、その誰かさんは自分の席に戻っていく。

「川添啓二」

「はい」

「水野」

そんなやり取りが行われ続け、

「三年Ｃ組、相葉洋子」

私の番が来た。

「はい」

返事する私がステージに向かっていく。普通に歩いているつもりだが、何だか地に足が着いてないみたいで、思ったより緊張している。

ステージに上がった。卒業証書を持って迎え撃つ校長まで、あと何歩か。

「三年Ｃ組、相葉洋子。以下同文」

校長はえつらそうに紙切れ一枚私に向ける。

私はそれを、確か左手からだよね？

自分に問いかけて、深くお辞儀をしながら受け取った。

「おめでとう」

校長は建前上だか何なんだか、祝いの一言。

私はそれを、

(……めでたくもなんともない)

「ありがとうございます」

心の声と裏腹に礼を述べる。

ありがたいその紙を持って、振り返る。目に入ってきた風景、体育館は卒業する三年生と、学校の決まりで見送る二年生がきれいな列で敷き詰められて、その後ろに保護者が並んでいる。

圧巻。

もう明日からここには居ない。

そう思ってしまうと、なんか、泣けて来ちゃうなあ。

私は自分の席に戻った。

卒業式が終わり、皆は講堂に集まった。

放課後（私がこの高校で、まだそう呼んでいいのか分からないが）にこうやって集まるのも最後。でも、誰もその事を言わない。

「相葉、相葉」

富山が呼ぶ。私は卒業証書の入った筒に巻いてあるリボンを結び直す（結び方が気に入らないかったので）手を止めた。

「あれあれ」

彼の指す方向を見る。誰かが少し離れた所で胡座をかいている。

よく見れば、

「……ケンイチ？」

ケンイチが真っ赤になって前を一点に見ている。時折歯を食いしばり、震えながら。必死に泣くのを耐えている。その様に、

「ぷっ」

今まで見たことのないケンイチの可愛らしさが可笑しく、吹き出してしまった。

「面白いやろ？」

聞く富山はニヤついて、ケンイチがいつ泣き出すのか期待している表情だ。

「うん、見たことなくて意外。でも、ケンイチらしいね」

「そだな……」

富山。表情は普通だけど、目が潤んでるぞ。男ってこういう事に涙モロイわねえ……

ちよつと優越感の女の私　でも、思い出すことなら山程あるよ

ね　今もケンイチを笑ったけど、昔の私では笑えなかっただろうな。あの時のままだったら、また怒ってたかどうか。

ん？

ふと見れば、ケンイチの後ろの方に、メイ・梅田・迫下と二年生の男連中。帰宅部でもよく集まる主翼のメンバーが何やらこそこそしている。ケンイチに気付かれないように柱の影に隠れ、何かを期待した顔で彼の様子を窺っている。

「アイツら何やってんの？」

富山に聞くと、

「ん？　ああ、あれ？　ケンイチが泣くか泣かないかで賭けてんだ

って」

呆れた風に言う。確かに呆れたことだが……。よく見れば、ケンイチが震える度に全員で身を乗り出し、

「ああー……！」

メイと迫下、そして梅田が悔しそうな溜息を吐き、

「よし！ よしっ、よし！」

梅田が嬉しそうなガッツポーズを取っている。

……確かに呆れるわね。

「梅田が泣かない方に賭けてんの……？」

ウンザリしながら聞く。富山は無言で頷き、表情も私と似たようなモノだ。

暇。というワケではないが、なんとなくそうなので、その五人の動きを見てみる。すると、

『あ』

私と富山が同時に口走った。ケンイチが連中に気付いたのである。

「あ、近づいてった」

私の冷めた状況説明に、

「目が怖いね」

富山も続いた。

「逃げた」

「ビビッてるね」

人の感情にお金を賭けていた後輩たちは、その罰を本人から受けるような　まさしく自業自得。

「ケンイチ走った」

「キレてるね」

後輩は散り散りになって逃げる。ケンイチは誰かを追いかけては誰かへと後輩たちに翻弄されていたが、そのうち　太っているのが不幸だった一人。

「迫下捕まっちゃった」

「みんな助けるつもりないみたいだね」

追いかけられていた連中は言葉通り、ケンイチから一番離れた柱に集まって、ケンイチが捕まえた迫下をどうするのか観察していた。
……非道いなあ……。

「まー、迫下だからねー……」

富山はしみじみと納得している。それもそうだ。問題はケンイチがこれからどうするかだ。迫下の顔に何かしてるみたいだけど……？
「ケンイチは迫下の顔に何してんの？」

富山は目が良く、見えているようで、

「落書き。おでこに何かとか書いてんじゃないのかな？」

「……その内、目にバーコードとか書き出すわよ」

私がそう進言すると、富山は笑う。

「そんな危ないことまでしないだろー？」

突然、迫下が叫ぶ。

「兄貴、マジでゴメン！ それだけは勘弁して！」

「うるせえ！ とつとと目エ出せやコラア！」

ケンイチの声を聴いて富山は、笑った顔のままで止まった。私は予想通りだったので満足気な顔をする。しかし 最初、冗談と思っていたケンイチは本気で迫下の眼にバーコードを書こうとしていたのが分かり、そこに居る者総勢でケンイチのマジックを取り上げた。（油性だったことに更に驚いた）

その後、ケンイチは自分をダシに賭け事をした連中に昼食として、ホツとドックを驕った、みんながそれを受け取る際、

「マスタードかけてやるよ」

サービス心たっぷりの笑顔でホットドック一本につきマスタード一本を使い切り、それを見て顔の青ざめた後輩に与えた。四人には二つの意味で『辛い』卒業式になってしまったのは言うまでもない。その間、卒業式の片づけ係に行っていたEとCが私たちと合流した。二人は私と目があつた途端、

「姉ちゃん行っちゃ嫌だー！」

二人揃って泣き付いてきた。愛美は覚悟してたけど、メイまで泣いたのは意外で、

「バカッ……！ そんな泣かなくても、いつだって会えるでしょ……！ ……こんな事で泣かないでよ……」

つい私まで涙を流し、三人で抱き合った。（後に思い返して一番恥ずかしかった出来事だった……）

でも、女の子が三人泣いてる傍で男四人が目を真っ赤にして黄色いホットドックを食べて、それをにこしながら見てる人がいて、凄い光景だっただろうな……。

泣き止んだ後は帰宅部全員でカラオケ行ったり、ゲーセンに行ったり、卒業式の後はこんな感じでいつも通りにはしゃいだ。一つ違うと言えば、愛美と梅田がやたらくっついていた気がするが……ひよつとして……？

愛美は茂野じゃなかったっけ……？

遊び回って終電間際の時間となっただけに、さり気なく急いで向かう中、

「ねえケンイチ」

「何？」

隣にいた彼へ、やつぱり並んで歩いてる二人組を指す。

ケンイチはニヤけて、

「裏切られた？」

「……言うと思った。」

「そんなんじゃないわよ、バカ」

どういう事なのか知りたかっただけよ……。

「オレも分かんねーよ」

私の心を読んだかのように呟くケンイチ。

「ただ、そういう事になっただけなら、勘繰らずに受け入れりゃいいんじゃないか？」

「……何かむかつく。でも、ここで怒っても大人気ないし、
「そうね、野暮だしね」

表面上、ケンイチに賛同する。

「そうそう」

彼も相槌を打ち

……………。

私はケンイチの頭を鞆で殴った。

「痛っ？ 何すんだよ？」

「前から言おうと思ったけど……………アンタ、ムカツクのよ。真面目な話をする、いつも私が小さく見えるから嫌になるわ。何様のつもりよ？」

私が睨むとケンイチは頭をさすったまま、

「いきなり何様って言われてもなあ……………。まあ、自分が小さいと気付くことは良いことだと思うぞ」

口調と表情は苦い。けれど、それがふざけた演技であることが判る。

……………ダメだ。コイツは一生はぐらかす……………。でも、それはそれで嫌だなあ……………。いつかはどんな問いでもいいから、ちゃんと答えて貰わないと。

取り敢えず今は、愛美と梅田 二人が予想通りだと良いなと思うだけで、ケンイチについては今度にしよう。

そう、必ずいつか

駅に着いた。私達と駅員以外は見あたらないので、嫌な予感があったが、最終の一つ前の電車に間に合っていたのが分かり、取り越し苦労で終わった。

ホームの屋根に吊されたライトは白く鋭く、ベンチに座る私達はとても孤独な場所にいる気がした。

みんなの顔を見る。

殆どが下を向いている。これでもう本当にお別れ。少なくとも明日からはこの制服で会うことはない。

けれど、別れる間際さえ、

「さよなら」

「じゃあね」

「ばいばい」

「またな」

いつも通りのことしか言わなかった。最後まで誰もその事を口にしない。けれど

いつか誰かが後ろを振り返った時、後悔じみて言うだろう。それが何時で誰かは分からないが。

相葉洋子 三年（後書き）

続きます。

相葉洋子 卒業後（前書き）

卒業式を終えて、相葉は時間を持て余していた。

相葉洋子 卒業後

くらやみが影を作ることはない。光のように区別されることは無い。水のように、風のように、滞ることは無い。

この世の中で、もつとも差別しないものかもしれない。

外の景色を見てみると、そんなことを考えた。そんな心境に至る、特たる理由はないのだが、暇だから余計なことを考えるのだろう。卒業式を終えて、丸二日経つ。

就職先に出向くのもまだ二週間も先のことで、この長い休みを樂しもうと思ったが、退屈が返って窮屈に感じる自分の性分をすっかり忘れていた。

誰かに連絡をとって、遊ぶのも悪くないが、呼び出す相手も思いつかない。今までの自分が常に受身だったからだ。

自分が何もしなくても、かまってもらっていた。

可愛がっていた後輩も自分から、遊びに来ていた。

ケンイチにも自分から動くことは無かった。

臆病な自分、卑怯な自分。

誰が来ても平静でいられると、自負していた。でも、最近では違ってきている。

自分から誰かに話しかけることを放棄しているから。

誰かが話しかけるのを待っているから。

だから、強いように思えるだけなのだ。

暇というものは恐ろしい。普段考えもしないことを考えさせられる。しかも、やたらネガティブなことばかり。

ベッドに寝転んで、ケータイをいじってみる。

着信履歴は、昨夜に愛美からかかってきた一件のみ。その内容は曲名から歌手を当てるといったものだった。CDを買おうとして忘れてしまったらしい。曲名だけでも見つけられるとは思っただが。

「ケンイチのヤツ……」

虚空に漏らした言葉は、恨み言だった。今、なぜか無性に彼に腹が立つ。アイツも暇なはずなのに。

「デートぐらい付き合ってたのに」

今までの自己嫌悪も忘れて、彼からの連絡を待っていた。

今日連絡が無かったら、知らないから。

他の誰かと遊ぶ気にもなれなかったが、だから「知らない」といったところで何も思いつかないが、心中で舌打ちする。

「あ、ケンイチ？」

一時間経った頃だろうか、結局、私は電話していた。我慢できないわけじゃない。お互い、暇なはずなのに向こうが連絡もよこさない訳が知りたくなつたのだ。

「どうした？」

電話の向こうはすごく騒がしい。しかも、聞きなれた声は何やら喚いている。

「うるさいね」

「ああ、茂野と梅田が暴れてる」

何か、自分の中で割れる音がした。

「どうしたの？」

「いや、梅田が愛美に告白したらいいんだけど、茂野を引き合いにだして断つたらしいんだよ。そんでな、オレがそれを知らなくて、二人をカラオケに誘っちゃったワケ」

曖昧な相槌を返す。

「で、今、何で付き合ってたやらないのかって、梅田のひがみのような、愛美に対するフォローのような。まあ、梅田はイヤツだなおレは感心してるんだけど」

「茂野は何て？」

鼻で笑うような息遣いが耳に入る。

「そりゃ、お前が言うのは野暮だろ。梅田にオレの好きな人が誰か

知ってるだろってさ」

随分前から平行線のままで、ついには怒鳴り合いに発展したらしい。

「一応、釘刺したから殴り合いまでは行かないと思うがな」

「楽しそうね」

「笑い事じゃないよ、こっちは遊ぶつもりだったのに」

溜め息混じりの声。今、苦勞してるのは、本当に分かる。

「でも、ケンイチはアクシデントが楽しいんでしょ？ 刺されたときも、茂野を殴った時も」

「トラブルに巻き込まれたり、自分から首突っ込んだりはよくあるな。そういう自分が好きではある。楽しんでるわけじゃないけどな」
分かってる。分かってるんだけど。

「じゃあ、大好きな自分のために、今回も頑張ったら？」

切った。

何言ってるの私。ワケ分かんない。

いや、でも何を男同士でカラオケなんか行ってるのよ。

そりゃ、何か腹立つじゃない。

何よ。私だって暇するんだから、誘ったっていいじゃない。そうすれば、こんな怒ることにもならない。

その辺に何で、気付かないの。

何時までも私をわかってくれない。

「何で、別れた相手にここまで腹が立つのよ」

ケータイを思いっきり投げつけた。枕が軽く浮いた。

「愛美、今から暇？ うん、メイも誘って。いいよ、私がオゴる」
鳴りっぱなしのケータイなんか、知らないから。

相葉洋子 卒業後（後書き）

次回、最終話です。

相葉洋子（前書き）

相葉洋子 卒業後 後編。最終話。

相葉洋子

「姉ちゃん、私たちここで帰るね」

次の角を曲がれば、私の家に着く。確かに、家に泊まるという話
はしていないが、カラオケボックスから家と駅では反対方向だ。

「帰るって、電車ないわよ？」

愛美の発言は無茶だ。何を思ってたのか。

視線を追ってみる。

家の前にケンイチが立っていた。

私は言った。

「じゃあ、愛美の家に行こうか？」

待てコラ。自分でも思ったし、二人からも言われた。

「どおりで、今日は変だなんて思ったんですよ」

「姉ちゃん、それはずるい」

メイと愛美、口々に責め立てる。

「違うわよ。別に今夜だって会う約束してたわけじゃないし」

言っと、愛美はわざとらしい溜め息を吐き、メイは頭を小さく振
った。

そんなあからさまに、呆れなくてもいいのに。

「とにかく、私たちは自力で帰る。心配しなくても大丈夫」

「姉さんにカラオケおごってもらったから、愛美の家までなら二人
でタクシー代出せるし」

それじゃあ。

二人は止める間も与えず、去ってしまった。

二人には後で、謝んなきゃな。

私は深呼吸して、ケンイチの方へ向かった。

「何でいるのよ」

彼は戸惑いながら、

「来なきゃいけないって思ったから」

不器用にはにかんで見せた。

彼の前を通り過ぎ、家の門を開けた。

「入ったら？ 寒いでしょ」

「いいのか？」

「いいわよ」

家は普段から誰もいない。母はとうの昔に死んでたし、父は仕事でろくに帰ってきた試しがない。姉すら、男のところに入り浸っている。

私が男を入れたところで、咎められる言われも無ければ、咎める人すらない。

昔、愛美に羨ましがられたっけ。

ケンイチを、男の人を、初めて家に入れた。

変に胸が高鳴る。

ケンイチを居間に通すと、すぐにコーヒーを出した。ケンイチは猫舌で、時間をかけて飲んでた。私は飲み終えるまで待った。

コーヒーを半ばまで飲むと、

「ごめんな」

優しい声が痛かった。謝るのは彼じゃない。

「別に」

どうして、素直になれないのだろう。謝ってしまったほうが楽なのに。

「別に謝る理由なんかないでしょ」

「あるよ」

聞きたくて、目を逸らした。

「ずっと、待たせてた」

待ってた。本当に待ってた。言われて気付いた。

「今更？」

せせら笑った。正直言うと、涙が出かけた。

「今まで気付かなかった」

違うな、ケンイチは訂正した。

「確信が無かった。だから、気付かないフリをしてた」

二人の離れた時間が長すぎて、私の中ではもう終わったものと、ケンイチは思っていた。でも、心のどこかで待っているんじゃないか。でも、それは自分のエゴじゃないのか。私に確かめて、自分が傷つく結果になることを恐れた。彼はそう説明した。

「卑怯だとは思った。そして、相葉が何も聞いてないのに、自分の確信だけで今、話してることもズルいと思う」

だから、すまない。

「ずるいよ」

「うん」

「なんで、いつも大人ぶるの」

「ごめん」

「なんで、アンタだけ大人なのよ」

「そんなことないよ」

「私だけ、子供みたいじゃない」

抱き寄せられていた。

私はそのまま、ケンイチの胸に甘えていた。不思議と居心地がよかった。

「また付き合うかどうか、オレにもよく分からない」
優しく頭を撫でる手が、心地よかった。

「このままでいい気がする。そう思う反面、より深く付き合いたい」

気持ちもある」

「……したいってこと？」

ケンイチは少し慌てた様子だったが、少し、考えて、
「そうかもしれない」

耳元で囁いた。確信犯だ。狙って囁いてきた。その手馴れた感じが、安心するけどム力つく。

「相葉の部屋に行く？」

ケンイチの問いかけに、私は無言で頷いた。ケンイチは面白がるように、微笑んでいた。

「何？」

「いや、相葉が黙って頷くの初めて見た」

可愛いと付け加えられ、可愛くないと怒って見せた。

二人で笑って、ケンイチがもう一度尋ねる。

私はまた、無言で頷いた。（意識したから、若干ぎこちない気がする）

部屋に向かう途中、無言だった。というより、私はすでに頭の中が真っ白になりかけて、階段を登る足取りも覚束無いほど、緊張していた。

自分の部屋のドアが、やたら耳に響く。ケンイチは気になってないだろうか。

ああ、しまった。お風呂に入りたい。

今更言っても、しょうがないのかな。

言っ正しいのか、分からない。

下着はこの前買ったばかりの物でよかった。

お風呂が気になる。電灯消さなきゃ。

あいば。

……コーヒー臭い。さっき飲んだから、当たり前か。でも苦くは無い。

随分、前に愛美とふざけてしたことがあるけど、唇や舌だけでも男の人って力強いんだ。

頭を撫でる手、背中をさする手。耳にかかる吐息。優しく、くすぐりたい。

！

首筋を何かが這う。思わず退いてしまった。それが分かっているかのように、追い掛けてくる。

首をかしげたまま、硬直してしまう。

止まった。

ケンイチの動きが止まった。ケンイチの時間だけ止まったように。私は自分が嫌がったのが原因だと思った。

「ごめん、違うの」

ケンイチは止まったままだった。目には、彼自身の手が映っている。私の胸を触ろうとする寸前の。

「ケンイチ？」

ケンイチはいったん目をつぶり、力なく笑って、

「ごめん」

私を抱きしめた。何がごめん？

「寝ようか？一緒に寝てもいい？」

いや、もともとそのつもりだったんだけど。

違う、このニュアンスは本当にただ、一緒に寝るだけだ。

どうなってるのか、分からない。

ケンイチは早々に、人のベッドに潜り込んでしまった。私も追いかけるように、入っていく。

私、何か悪いことしたのかな。

「私のせい？」

「いや、違うよ」

「本当に？ 正直に言って、怒らないから」

「いや、本当に相葉のせいじゃない」

木造の天井。電気は消えていて、埃っぽい木目は見えない。窓を見ても暗く、近くの公園で咲いていたはずの桜は不気味な影になっており、私は目を逸らしていた。敷かれた布団は暖かく、切ない。私一人ではないから。

ふと顔を横に向けると、隣の男はまた布団からはみ出ている。寝相ではない、起きているのは分かっている。

避けているのだ 私を。

何で……？

「ねえ……ケンイチ」

私は横にいる彼の名を呼んだ。

続けて、聞いた。

訴えに近かったかもしれない。

「どうして何もしないの？ 私が汚いから？」

「違う。そんな事は、言わないでくれ」

搾り出したような声が返ってきた。

「違うのなら、何故？ いいじゃないの、抱けば」

だって、私は好きよ。このまま、訳のわからないまま、夜を過ごすのは嫌。

「何故拒むの？」

「触れない」

「……おっぱい小っちゃいから？」

吹き出しながらも、答える。

「ぜんぜん関係ない」

一瞬、緩和した空気はまた張り詰めた。

「どうして触れないの？」

遠くから、電車が通る音が聞こえる。こんな時間に走るのだから、貨物列車か寝台列車だろう。静かな空気に滑車の音がよく響いた。聞こえなくなるのを待って、会話を戻した。

「黙らないでよ」

ケンイチは答えない。

「初めてってワケじゃないんでしょう？ 私知ってるんだから」

むしろ初めては私なんだし。その私が高で、ここまで気を使うことになってるのか。

「せめて……答えてよ」

もう、答えてもらえないのか。諦め始めた時、

「大好きなんだ」

……え？

「聞こえないわ」

聞き違いと思った。それはできない理由にならないから。

「好き過ぎて、触れないんだ」

ケンイチが適当な嘘をついたようではなかった。むしろ、適当でもなかった。さらに厄介なことに、その気持ちが私には分かっていた。

そんなの、そんなの今更になって……。

「じゃあ、なんでもしたいなんて言うのよ？」

「ごめん」

オレもこうなるまで知らなかった。言われなくても、続きが分かった。

ケンイチは震えていた。

私は泣けなかった。

ただ哀れで、泣くよりも胸が痛かった。ケンイチの背中を抱いて、眠った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7325a/>

桜坂高校帰宅部

2010年10月8日11時32分発行